大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.74　　2019. 7. 1.

目次

「舟の櫂」――退任の辞にかえて　1
2019(令和元)年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧　2
2019(令和元)年度「指定研究」等研究目的紹介　4
2019(令和元)年度「一般研究」等研究組織一覧　8
2019(令和元)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介　13
海外学会参加・研究調査報告　21
国内研究調査報告　31
公開講演会・公開研究会　36
東京分室 PD 研究員個人研究紹介　44
彙報　48

「舟の櫂」――退任の辞にかえて

前・真宗総合研究所長　加藤 丈雄

帰郷

連作詩『月に憑かれたピエロ』より
訳　加藤丈雄

月の光は　舟の櫂
舟はといえば　睡蓮の花
花に乗ってピエロは南に向かう
片雲の風また順風に

波音は口ずさむ　深い音階を
そして　軽やかに小舟を揺らし
月の光は　舟の櫂
舟はといえば　睡蓮の花

ベルガモへ　ふるさとへ
今や　ピエロは帰郷する
ほのかにもう東が白み始め
はるかに拡がる緑の水平線
―― 月の光は　舟の櫂
作 Giro，訳 Hartleben，作曲 Schönberg

うたわれている季節は、ちょうどこの「研究所報」をお読み頂いている頃であろうか、初夏の夜、睡蓮が見事な花を咲かせ、月に酔いしれたピエロに（日本の一寸法師よろしく）花の舟に乗り故郷に帰る夢を見させてくれる。

そんな夢遊病のピエロ同様、私もこの連作詩の魅力に少しばかり酔っている。ベルガモ・パリ・ベルリン・ウィーン／喜劇・絵画・詩・音楽。ピエロは欧州文化交流の波頭を超えていく。それぞれ詩人や作曲家は手荒い流儀で自らの『ピエロ』連作を「創作」した。現代なら訴訟沙汰になりかねない程だが、創造にはそれくらいの熱量が必要なのかもしれない。

＊

今年の３月末をもって２年間の副学長および真宗総合研究所（真総研）所長の任期を無事（何とか）終えることができた。

振り返れば、2017 年の春は、ちょうど大谷大学が３学部体制に移行する１年前であり、学内外に向けて様々な広報活動がなされていた頃である。もうずいぶん以前のことのように思えるが、まだ２年しか経っていない。たしか今頃は、３学部発足記念のシンポジウムも華々しく行われていた。と同時に、文科省の所謂「ブランディング事業」応募に向けた取組を行っていたのも、２年前のこの頃であったし、さらには EBS の真総研への移管も時期を同じくしていたはずである。

2008 年、本学に私がお世話になってから、専門がドイツ文学ということもあり、真総研の研究に携わったこともなければ、そもそも真総研の活動すらきちんと理解してはいなかった。そんな私が EBS のことや「ブランディング」あるいは３学部体制などについて語っても型どおりの浅薄なものにしかならない。そこで「研究所報」の巻頭言は、それぞれ最も相応しい方々に執筆を依頼した。No.70 は木越康学長、No.71 は EBS について井上尚実国際仏教研究班代表、No.72 は「ブランディング」ワーキングチームから箕浦暁雄准教授、そして No.73 には真総研の東京分室を本年３月末に退任予定であった池上哲司分室長に寄稿して頂いた（学長以外、肩書は当時）。

今読み返してみても、それぞれ時宜にかなった読み応えのある巻頭言で、執筆の方々には心から感謝しているし、これで本「所報」に対する私の責任は十分果たせたものと思っていた。

ところが、５月に入って研究所から執筆の依頼を受けた。何でも、歴代所長で所報に書かなかった例はないとのこと。もちろん前例を墨守する必要もないし、新所長や新分室長にお書き願うというのもまたタイムリーではあるが、着任早々の多忙については他人事とは思えない。遅まきながら前所長として駄文を草した次第。とはいえ、冒頭に紹介したように（芸術のみならず）研究においても、相互交流は創造的な「舟の櫂」となるはずである。摩擦も起こり得る。それでも、真総研各位の一層の刺激的交流を期待している。

2019（令和元）年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
新しい時代における寺院のあり方研究	研究課題	現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究
	研究代表者	木越　康（学長・教授・真宗学）
	研究員	東舘紹見（教授・日本仏教史）
		山下憲昭（教授・社会福祉学）
		徳田　剛（准教授・地域社会学）
		藤枝　真（准教授・宗教学・哲学）
		藤元雅文（准教授・真宗学）
	嘱託研究員	本林靖久（本学非常勤講師）
	研究補助員（RA）	松岡淳爾（博士後期課程第３学年）
		磯部美紀（博士後期課程第１学年）

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	Michael J. Conway
	研究員	Michael J. Conway（講師・真宗学）
		加来雄之（教授・真宗学）
		Dash Shobha Rani（准教授・仏教学）
		田中潤一（准教授・教育哲学）
		新田智通（准教授・仏教学）
		松川　節（教授・東洋史学）
		松浦典弘（教授・東洋史学）
	嘱託研究員	Michael Pye（マールブルク大学名誉教授）
		James C. Dobbins（オバーリン大学名誉教授）
		Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
		Paul Watt（早稲田大学エクステンションセンター非常勤講師）
		下田正弘（東京大学教授）
		羽田信生（毎田周一センター所長）
		Wayne S, Yokoyama（元花園大学講師）
		Robert F. Rhodes（EB 誌編集長、本学名誉教授）
		John LoBreglio（EB 誌編集者、オックスフォード・ブルックス大学准教授）
		三鬼丈知（本学非常勤講師）
		井上尚実（教授・真宗学）
		井黒　忍（准教授・東洋史学）
	研究補助員（RA）	常塚勇哲（博士後期課程第３学年）
		鶴留正智（博士後期課程第２学年）
		YAN RUOLIN（博士後期課程第１学年）

西蔵文献研究	研 究 課 題	チベット語文献のデータベース化
	研究代表者	三　宅　伸一郎
	研　究　員	三　宅　伸一郎（教授・チベット学）
		松　川　　節（教授・モンゴル学）
		上　野　牧　生（短期大学部講師・仏教学）
	嘱託研究員	白　館　戒　雲（本学名誉教授）
		伴　　真一朗（2018 年度西蔵文献研究嘱託研究員）
		山　口　欧　志（奈良文化財研究所研究員）
		LAMAO ZHUOMA（青海民族大学宗喀巴研究院研究員）
	研究補助員（RA）	GENGZANG QIEZHU（博士後期課程第３学年）
		秦　野　貴　生（博士後期課程第３学年）
ベトナム仏教研究	研 究 課 題	ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究
	研究代表者	織　田　顕　祐
	研　究　員	織　田　顕　祐（教授・仏教学）
		浅　見　直一郎（教授・東洋史学）
		箕　浦　暁　雄（教授・仏教学）
		釆　睪　　晃（准教授・仏教学）
	嘱託研究員	桃　木　至　朗（大阪大学教授）
		大　西　和　彦（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）
		Pham Thi Thu Giang（ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授）
		宮　嶋　純　子（関西大学東西学術研究所非常勤研究員）
		TRAN QUOC PHUONG（フエ仏教協会教育部副部長、フエ市仏教中高等学校副校長）
	研究補助員（RA）	NGUYEN TUONG GIANG（博士後期課程第２学年）
清沢満之研究	研 究 課 題	『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究
	研究代表者	西　本　祐　攝
	研　究　員	西　本　祐　攝（短期大学部講師・真宗学）
		一　楽　　真（教授・真宗学）
		加　来　雄　之（教授・真宗学）
		福　島　栄　寿（教授・歴史学）
		藤　原　正　寿（准教授・真宗学）
		西　尾　浩　二（講師・哲学）
		大　艸　　啓（講師・歴史学）
	嘱託研究員	名　畑　直日児（真宗大谷派教学研究所所員）
		浦　井　　聡（任期制助教・宗教哲学）
	研究補助員（RA）	藤　井　了　興（博士後期課程第２学年）
		澤　﨑　瑞　央（博士後期課程第２学年）［５月１日付委嘱］
東京分室指定研究	研 究 課 題	宗教と社会の関係をめぐる総合的研究－社会的価値観における宗教の役割の解明－
	研究代表者	井　黒　　忍
	研　究　員	井　黒　　忍（准教授・歴史学）
		青　柳　英　司（PD 研究員・真宗学）
		大　澤　絢　子（PD 研究員・宗教学・近代宗教文学）
		鍾　　宜　錚（PD 研究員・生命倫理学）
		西　村　晶　絵（PD 研究員・フランス文学）

【資料室】

名　　称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題	大学史関係資料の収集・整理
	室　　長	阿　部　利　洋（研究所主事・教授・社会学）
	嘱託研究員	松　岡　智　美（2018年度大谷大学史資料室嘱託研究員）
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築
	室　　長	阿　部　利　洋（研究所主事・教授・社会学）
	嘱託研究員	川　端　泰　幸（講師・日本中世史）
		清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
		舟　橋　智　哉（2018年度デジタル･アーカイブ資料室嘱託研究員）

2019（令和元）年度「指定研究」等研究目的紹介

新しい時代における寺院のあり方研究

現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究

研究代表者・学長　木越 康
（真宗学）

本研究班は2017年度に立ち上げられた研究プロジェクトであり、2019年度までの３年計画でスタートした。今日まで日本全国に散在する寺院は、それぞれのコミュニティのなかで一定の役割を果たしてきたと考えられる。教化を中心とした宗教活動の拠点として、あるいは所属する門信徒の葬儀や法要の場として、または地域コミュニティにおける諸行事への協力など、多様な形で地域コミュニティの形成・維持・発展に一定の役割を担ってきた。しかし近年の全国的な少子高齢化と人口の都市部への集中によって、地方の小規模市町村ではコミュニティの維持が困難となり、それに伴い寺院の置かれた状況や果たすべき役割も変化してきている。

このような状況の中で、今後、過疎地域において寺院がコミュニティの形成や維持（あるいは活性化）にどのような役割を果たし得るのかを探るのが、本研究「新しい時代における寺院のあり方研究」の大きな目的となる。これまでの２年間の研究は、先行研究者との情報交換にはじまり、2017年度下半期からは実際に過疎地域に入って複数回にわたる調査活動を行ってきた。その成果についてはこれまでも折に触れて論文や学会で公表してきたが、本年は最終年に当たり、主として以下の４点から研究を進める。

①本研究テーマに関連する活動を行っている研究者を招き、さらに交流の場を広げる。

②主たる調査対象地域である岐阜県揖斐川町春日地区における調査活動のデータを整理し、可能な形で公表、活用するための検討を行う。

③10月に札幌で開催されるシンポジウム「人口減少社会の現在と次世代の育成――地域と寺院の視点から――」において、本研究の課題の振り返りを行うとともに、今後の研究の可能性を検討する。

④課題解決のための継続的な研究の形を模索する。

本研究において取り上げる課題は、研究班としての最終年を迎えても、決して解決に向けた具体策が得られるわけでも、地域や寺院としての正しい活動の方向性が見出されるわけでもないものと思われる。むしろ解決困難な課題が、より深刻な問題として明確になることが、研究成果の一つとして予想される。一応の区切りの年となるため、出来るだけ課題を課題として整理して提示すること、かつ、今後に向けた研究継続の可能性を最終的には見定めていきたいと考える。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・講師　Michael J. Conway
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。今年度は英米班、東アジア班の二班の体制で研究を進め、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

〈研究テーマ〉

①英米班：真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。

②東アジア班：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。

〈活動内容〉

《英米班》

①国際学会への参加

1）国際真宗学会（IASBS）第19回学術大会（2019年５月24日㈮～５月26日㈰，台湾の法鼓文理学院）

加来雄之研究員がコーディネーターを勤め、学外の研究者を３名招聘し、「グローバル社会における親鸞思想の伝播の課題と可能性」という題で以下のパネル発表を行う。

「親鸞思想と中国仏教との出会い」

陳敏齢（CHEN Minlin　輔仁大學宗教學系兼任教授）

「自然法爾について」

張偉（ZHANG Wei　同朋大学教授）

「『教行信証』の英訳の限界と英文注釈書作成の必要性について」

マイケル・コンウェイ（Michael CONWAY　研究員）

「親鸞伝のポテンシャル：宗教間対話の事例と文化間対話の可能性」

マルクス・リュウシュ（Markus RUESCH　龍谷大学　日本学術振興会外国人特別研究員）

加えて井上尚実嘱託研究員は「Shinran's Criticism of the 'Transfer of Merit' as Self-Powered Practice」（親鸞が批判する自力行としての「回向」）と題する個人発表を行う。

2）アメリカ宗教学会（AAR）年次大会（2019年11月22日㈮～11月26日㈫，カリフォルニア州サンディエゴ市）に研究員がアメリカにおける仏教研究の動向を把握し、『*The Eastern Buddhist*』誌の原稿を収集するために参加する。

3）アメリカ哲学会（APA）東部学術大会（2020年１月７日㈫～１月10日㈮、ニューヨーク市）に田中潤一研究員が参加し、研究発表を行う。

②真宗関係の翻訳研究

『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

2017年に大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトが立ち上がった。それから５年間の予定で年２回（３月にバークレー、６月に京都で１回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に２冊の研究書（注釈付き本文英訳＋研究論文集）出版を目標とする。その第６回ワークショップは2019年６月21日㈮から23日㈰に本学で開催し、第７回は2020年３月６日㈮から８日㈰にバークレー市の浄土真宗センターでカリフォルニア大学バークレー校の主催で開催する。

③国際シンポジウムの成果出版

1）真宗近代教学アンソロジー *Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの成果出版

2015年６月26日㈮、27日㈯の２日間、大谷大学で *Cultivating Spirituality* 出版（SUNY, 2011）を記念して開催されたシンポジウムの成果を、マーク・ブラム教授（嘱託研究員）とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集によりハワイ大学出版から出版する予定で編集作業を進める。

2）エトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）と共催の第２回国際仏教シンポジウムの成果出版

2016年５月26日㈭、27日㈮の２日間ハンガリーのELTE東アジア研究所の共催により、「仏陀の言葉とその解釈」というテーマで開催した第２回共同シンポジウムの成果を、ELTEのハマル・イムレ教授と井上尚実嘱託研究員の共編で、出版するために編集校正作業を進める。

④The Eastern Buddhist Society 東方仏教徒協会（EBS）の事業

英文学術誌 *The Eastern Buddhist* の編集・出版過程の効率化に向けて編集体制の充実を図りつつ、2021年に迎える協会設立百周年のために準備を進め、協会が長年、抱えてきた課題（購読方法、ネット公開、発行の遅れ等）の解決に取り組む。

⑤国際シンポジウムの開催

「女性と仏教」をテーマとした国際シンポジウムを2019年10月11日㈮にダシュ・ショバ・ラニ研究員の主導で開催する。

⑥公開講演会の開催

国内外で活躍している仏教学・真宗学関係の研究者を招聘し、公開講演会を３回程度開催する。

⑦真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について、図書館への移管の可能性について検討する。

《東アジア班》

①中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づき、本年度においても引き続き、双方の研究者が往来し、共同研究を実施することとし、本学から２名を派遣、先方から４名（２名の経費は先方の負担）を招聘し、それぞれ公開研究会を開催する。

②2015 年 12 月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集を出版する。

③戦前、戦中期の大谷派の海外布教に関する研究会を開催する。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

（1）専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること

（2）重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること

を目的としている。

また、海外の研究機関との交流を通し、それら研究機関に所蔵されている貴重なチベット語の各写本・経典類や学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。これらの目的を達成するために、今年度は以下の研究を行う。

1. チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

大谷大学図書館所蔵のチベット語文献の中には、他にその存在が知れていないの稀覯文献（例えば蔵外 12767『目連救母経』）が存在する。また、版本によって一般に知られている文献であっても、それらと異なる読みを示す貴重な写本なども存在する（例えば蔵外 10003『王統明示鏡』など）。チベット文献学の発展に寄与するために、それら貴重な文献の公開を視野に入れ、順次、写真撮影を行う。それらの中でも特にウメー書体で記された写本については、読みやすい形で提供するために、ウチェン体（楷書体）への翻字作業を行う。特に極楽浄土信仰に関する小品（蔵外 13940『極楽に生まれるポワ（遷移）と犯戒還浄など』）については、関連する文献を博捜し、その文献学的研究を進める。また、『プトン仏教史』の翻訳研究も行う。

2. モンゴル国立大学との共同研究

第２期（2016-18 年度）学術交流協定（研究テーマ「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13 世紀～17 世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」）にもとづいて行われた調査研究活動の共同研究成果の刊行を行う。

3. 海外の研究者・研究機関との交流

2018 年度に中国蔵学研究中心との間で締結された「学術交流に関する協定書」に基づく共同研究を具体的に進める。また、随時、海外のチベット学研究者らによる公開研究会を随時開催する。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授　織田 顕祐
（仏教学）

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づき共同研究を推進する。調査・研究のみならず研究者育成などベトナム側からの要請に応じて、仏教研究に関する相互学術交流を行う。

本研究は、開始当初から次のような視野のもとに進められている。第一に、これまでわが国では十分検討されてこなかったベトナム仏教の実態を調査し、特に北部ベトナムにおける仏教受容の一端を明らかにすること。第二に、それらの調査を通して得られたベトナム仏教の独自性を明らかにすることである。ベトナムは、地理的な関係から日本よりもかなり早く仏教を受容したようである。そして現在、両国に根付いた仏教の様子は大きく異なっている。こうした違いは、仏教土着の地域的異なりや、思想史的背景の違いからくるものであろう。それ故、こうした視野のもとに、ベトナム仏教の実態を知ることは、東アジアにおける仏教の展開を新たな視点から見直すという可能性を持つものと言うことができる。研究班の具体的な活動内容は

次のとおりである。

①「ベトナム仏教概説」の日本語訳を進める（そのための研究協議・相互交流を実施する）。

②「日本仏教概説」のベトナム語訳を進める（そのための研究協議・相互交流を実施する）。

③定期的な現地フィールドワークを実施する（主として北部地域の寺院調査、仏教典籍の版木版本調査）。

④ベトナム仏教関係資料（特に『禅苑集英』を中心に）の解読研究の実施。

⑤ベトナムにおける日本語研究・日本語教育を含む日本研究、東アジア研究、仏教研究の現況を把握する。

⑥ベトナムの仏教（宗教）・歴史・文化に関する文献の収集。

これらはすべて、研究班発足当初からの課題であるが、今年度は三年計画の最終年度に当たるので、特に②「日本仏教概説」のベトナム語訳の完成出版を活動の中心に据えて諸般努力する。また④の『禅苑集英』の解読研究は定期的に実施する。ベトナム仏教は、中国から伝来した禅宗（臨済禅、曹洞禅）であると自称しているが、我々が周知している日本や朝鮮半島の禅宗とは相当異なったことが説かれている。それ故、可及的速やかに解読研究の成果を集約して学界に提供したいと考えている。

清沢満之研究

『清沢満之全集』別巻の編纂と思想研究

研究代表者・講師　西本 祐攝
（真宗学）

本研究は、大谷大学編『清沢満之全集』（全９巻、岩波書店、2002-3、以下『全集』）別巻の刊行を研究目的としている。

近年、進展を見せる清沢満之研究において『全集』は清沢満之の著述を踏まえる際のテキストとして必ず参照・引用されており、『全集』刊行はその研究推進に大きく寄与していると言えよう。『全集』編集の中心的役割を担った真宗総合研究所の本研究は、1981年度の研究所開所から十年を経た、1991年度に発足している。1993年度に当時の研究代表者であった安冨信哉教授によって『全集』刊行への本格的な提言がなされて以降、2002年４月の響流館開館に先んじて、同年２月に響流館内の研究所に実務の場を移すまでの十年間を含め、文献収集と翻刻校正、掲載基準に関する検討が重ねられた。刊行に際しては編集委員11名、編集実務担当教員27名、研究補助員４名という全学的な体制がとられたが、刊行の実現はそれらのメンバーのみではなく、研究班発足当時からの研究活動に携わってきた研究員、研究補助員と研究補助者（数十名）の尽力によるものであることを銘記しておきたい。

『全集』刊行後、清沢満之研究は新たな展開をみせている。その中で『全集』未収録文献の情報が寄せられてきた。研究所では、2014年度から本研究を再開し、『全集』未収録文献を収集・翻刻し、別巻刊行に向けた活動を行っている。2017年３月末現在で、新たに清沢満之著述と認めることができる三十数点の文献を収集した。それらについて『全集』掲載基準についての精査を行い、２巻分に及ぶ基準を満たす文献を確認するに至った。詳細は「大谷大学編『清沢満之全集』未収録の新出清沢満之著述群について」（『真宗総合研究所研究紀要』第35号所収）を参照されたい。

これらの文献を『全集』別巻１・別巻２として刊行し、清沢満之研究の進展に寄与することが本研究の目的である。本年度は、年度内の別巻１刊行に向けて、実務作業をおこなっていく。

大谷大学史資料室

大学史関係史料の収集・整理

室長・教授　阿部 利洋
（社会学）

大谷大学の歴史にかかわる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の対策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるよう取り組んでいる。いまだ十分に整理できていない所蔵資料の分類整理を継続的に進めながら、図書館１階エントランスホールの展示ケースを活用し、年２～３回のスポット展示によって所蔵資料の公開・展示を行う。

また、今年度も引き続き全国大学史資料協議会の研究会（西日本部会）に参加し、他校との意見交換を通じて、本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善へ向けて検討を加える。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・教授　阿部 利洋
（社会学）

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を継続的に行っている。その一環として、2010年度より本学図書館所蔵古典籍を書誌学データベースとして登録する作業を進めており、また2017年度からは本学博物館所蔵のパーリ語貝葉写本の研究およびデジタル・データ化の作業にも取り組んでいる。

東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる総合的研究 －社会的価値観における宗教の役割の解明－

研究代表者・准教授　井黒 忍
（歴史学）

多様な価値観を内包する現代社会において、宗教のあり方が問われつつある。そうした中、社会において宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も多い。そこで本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことを目的とする。人類にとって根本的な問いであり続ける「どう生きるのか？」、「どう死ぬのか？」という問題を主軸とし、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。各研究員の研究目的は以下の通りである。

青柳研究員は、親鸞の主著とされる『教行信証』の訓点に着目して、親鸞の言語表現の特徴と独自性とを明らかにする。これによって親鸞が当時の社会、特に仏教界に対して、自身の思想をどのような仕方で表明しようとしていたのかを探る。

大澤研究員は、近代日本（1868-1945）の枠組みで、文学・雑誌・映画も含む大衆文化のメディアを精密に分析することにより、仏教と女性の関係の一側面を解明する。本研究では、メディアにおける女性の表象に重点を置きつつ、文学と歴史学の相互作用に着目することで、日本の近代化の過程における宗教者イメージの形成プロセスを明らかにする。

鍾研究員は、「どう死ぬのか」という問題について、日本と台湾を中心に、それぞれの終末期医療の法制化の動きを調査し、終末期の意思決定に関する宗教者の取り組みを考察することで、人生の最終段階における宗教の役割を解明する。

西村研究員は、20世紀のフランスにおいて諸宗教が政治の場にいかに関わり、社会規範や社会制度の変容にどのような影響を及ぼしたか、またアンドレ・ジッドをはじめとする宗教思想家や文学者がその中でどのような役割を担ったかという問いを、テクスト分析を通じて明らかにする。

井黒研究員は、研究全体のとりまとめを行うとともに、アジア乾燥域における水利秩序と宗教との関係性を考察する。

2019（令和元）年度「一般研究」等研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2015～2019年度「科研費」採択】一般研究（江森班）	研究課題	健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーション能力の測定方法の開発
	研究代表者	江　森　英　世
	研　究　員	江　森　英　世（教授・数学教育学）
	協同研究員	竹　村　景　生（奈良教育大学附属中学校教諭）

【2016～2019年度「科研費」採択】 一般研究（上田敏班）	研 究 課 題	ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究
	研究代表者	上　田　敏　樹
	研　究　員	上　田　敏　樹（本学非常勤講師・特別研究員）
		福　田　洋　一（教授・仏教学）
		柴　田　みゆき（教授・情報処理学）
		酒　井　恵　光（准教授・計算機科学）
		高　橋　　真（准教授・比較認知科学）
	協同研究員	平　澤　泰　文（本学非常勤講師）
		池　田　佳　和（元本学特別任用教授）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（鈴木班）	研 究 課 題	変動帯の文化地質学
	研究代表者	鈴　木　寿　志
	研　究　員	鈴　木　寿　志（教授・文化地質学）
		廣　川　智　貴（准教授・ドイツ文学）
	協同研究員	清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
		大　井　修　吾（滋賀大学共同研究員）
		梅　田　真　樹（京都西山短期大学非常勤講師）
	研究協力員（支援）	石　橋　弘　明（2016年度一般研究鈴木班研究協力員（支援））
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（西村班）	研 究 課 題	地方の社会解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の形成と展開
	研究代表者	西　村　雄　郎
	研　究　員	西　村　雄　郎（教授・地域社会学・コミュニティ論）
	協同研究員	岩　崎　信　彦（神戸大学名誉教授）
		鰺　坂　　学（同志社大学名誉教授）
		杉　本　久未子（元大阪人間科学大学教授）
		堤　　圭史郎（福岡県立大学人間社会学部准教授）
		寄　藤　晶　子（福岡女学院大学人文学部准教授）
		加　藤　泰　子（同志社大学嘱託講師）
		高　野　和　良（九州大学大学院人間環境学研究院教授）
		松　宮　　朝（愛知県立大学教育福祉学部准教授）
		相　川　陽　一（長野大学環境ツーリズム学部准教授）
		小　内　純　子（札幌学院大学法学部教授）
		河　野　健　男（同志社女子大学特任教授）
		藤　井　和　佐（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
	研究協力員（支援）	吉　田　愛　梨（首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程）
【2017～2021年度「科研費」採択】 一般研究（上野班）	研 究 課 題	世親作『釈軌論』の総合的研究
	研究代表者	上　野　牧　生
	研　究　員	上　野　牧　生（短期大学部講師・仏教学）
	協同研究員	堀　内　俊　郎（浙江大学ポストドクトラルフェロー）
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（武田班①）	研 究 課 題	５～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較史的研究と３Ｄアーカイブ作成
	研究代表者	武　田　和　哉
	研　究　員	武　田　和　哉（教授・歴史学・考古学・人文情報学）
		川　端　泰　幸（講師・日本中世史）
	協同研究員	吉　川　真　司（京都大学大学院文学研究科教授）
		横　内　裕　人（京都府立大学文学部教授）
		藤　原　崇　人（龍谷大学文学部准教授）
		正　司　哲　朗（奈良大学社会学部准教授）
		古　松　崇　志（本学非常勤講師･京都大学人文科学研究所准教授）
		高　橋　学　而（福岡文化学園博多女子高校教諭）

【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（武田班②）	研 究 課 題	歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究
	研究代表者	武　田　和　哉
	研　究　員	武　田　和　哉（教授・歴史学・考古学・人文情報学）
		三　宅　伸一郎（教授・チベット学）
	協同研究員	吉　川　真　司（京都大学大学院文学研究科教授）
		渡　辺　正　夫（東北大大学院生命科学研究科教授）
		矢　野　健太郎（明治大学農学部教授）
		江　川　式　部（明治大学商学部兼任講師）
		横　内　裕　人（京都府立大学文学部教授）
		鳥　山　欽　哉（東北大大学院農学研究科教授）
		等々力　政　彦（2018 年度一般研究武田班②協同研究員）
		佐　藤　雅　志（東北大学大学院農学研究科学術研究員）
		清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
		水　谷　友　紀（京都府立大学学術研究員）
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（福島班）	研 究 課 題	新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究
	研究代表者	福　島　栄　寿
	研　究　員	福　島　栄　寿（教授・歴史学）
	協同研究員	知　名　定　寛（神戸女子大学文学部教授）
		長　谷　　暢（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
		川　邉　雄　大（二松学舎大学非常勤講師）
	研究協力員（支援）	上　山　　慧（2018 年度一般研究福島班研究協力員（RA））
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（村山班）	研 究 課 題	西洋哲学の初期受容とその展開－井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開－
	研究代表者	村　山　保　史
	研　究　員	村　山　保　史（教授・西洋哲学・日本哲学）
		Michael J. Conway（講師・真宗学）
		西　尾　浩　二（講師・西洋哲学）
		味　村　考　祐（任期制助教・西洋哲学）
	協同研究員	狭　間　芳　樹（本学非常勤講師）
		三　浦　節　夫（東洋大学ライフデザイン学部教授）
		柴　田　隆　行（東洋大学社会学部教授）
		ライナ・シュルツア（東洋大学情報連携学部准教授）
		長谷川　琢　哉（東洋大学井上円了研究センター客員研究員）
		東　　真　行（親鸞仏教センター研究員）
【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（松川班）	研 究 課 題	モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究
	研究代表者	松　川　　節
	研　究　員	松　川　　節（教授・モンゴル学）
	協同研究員	小　野　　浩（京都橘大学文学部教授）
	研究協力員（RA）	ARILDII BURMAA（博士後期課程第３学年）
【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（徳田班）	研 究 課 題	日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究
	研究代表者	徳　田　　剛
	研　究　員	徳　田　　剛（准教授・地域社会学）
	協同研究員	梅　村　麦　生（日本学術振興会特別研究員 PD）

【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（コンウェイ班）	研 究 課 題 研究代表者 研　究　員 協同研究員	中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究 Michael J. Conway Michael J. Conway（講師・真宗学） 齊　藤　隆　信（佛教大学特任教授） 宮　井　里　佳（埼玉工業大学人間社会学部教授）
【予備研究】 一般研究（柴田班）	研 究 課 題 研究代表者 研　究　員 協同研究員	系図・紋章からみる画像記号と文字データの同定・管理・可視化および表現手法の研究 柴　田　みゆき 柴　田　みゆき（教授・情報処理学） 高　橋　　真（准教授・比較認知科学） 松　浦　　亨（北海道大学病院臨床教授） 生　田　敦　司（本学非常勤講師） 杉　山　正　治（本学非常勤講師） 横　澤　大　典（本学非常勤講師） 平　塚　　聡（本学非常勤講師）

【個人研究】

研究名等	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織	
【2016～2019年度「科研費」採択】 一般研究（脇中班）	研 究 課 題 研究代表者	再犯リスク低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価 脇　中　　洋（教授・発達心理学・法心理学）
【2016～2019年度「科研費」採択】 一般研究（渡邉班）	研 究 課 題 研究代表者	幼児期・児童期前期における自己評価変動モデルの構築 渡　邉　大　介（講師・発達心理学・教育心理学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（阿部班）	研 究 課 題 研究代表者	東南アジアサッカー市場における移民選手の戦略とネットワーク 阿　部　利　洋（教授・社会学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（福田班）	研 究 課 題 研究代表者	インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築 福　田　洋　一（教授・仏教学）
【2017～2021年度「科研費」採択】 一般研究（原田班）	研 究 課 題 研究代表者	ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから 原　田　奈名子（教授・体育科教育・舞踊学および舞踊教育学・Somatics）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（池永班）	研 究 課 題 研究代表者	嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究 池　永　真　義（准教授・美術教育学）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（塚島班）	研 究 課 題 研究代表者	19世紀フランス詩における宗教的混淆－教育から文学創造へ 塚　島　真　実（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（清水班）	研 究 課 題 研究代表者	東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明 清　水　洋　平（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2020年度「科研費」採択】 一般研究（渡邊班）	研 究 課 題 研究代表者	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明 渡　邊　温　子（本学非常勤講師・特別研究員）
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究（翁班）	研 究 課 題 研究代表者	認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開－「主体」論を超えて 翁　　和　美（特別研究員）
【2018～2020年度「科研費」採択】 一般研究（西川班）	研 究 課 題 研究代表者	タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響 西　川　幸　余（准教授・英語教育・英米文化）
【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（岡部班）	研 究 課 題 研究代表者	生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討 岡　部　　茜（講師・社会学・社会福祉学）

【2018～2021年度「科研費」採択】 一般研究（鍾班）	研 究 課 題 研究代表者	儒教文化で捉える「孝」の表現と終末期医療倫理の再構築－日本と台湾の比較を中心に－ 鍾　　宜　錚（PD 研究員）
【2018～2019年度「科研費」採択】 一般研究（阿部友香班）	研 究 課 題 研究代表者	農業奉公の歴史社会学的研究－労働を通じた社会的包摂に着目して 阿　部　友　香（任期制助教・特別研究員）
【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（スミザーズ班）	研 究 課 題 研究代表者	Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English Ryan W. Smithers（准教授・外国語教育・言語学・英米文化）
【2019～2023年度「科研費」採択】 一般研究（高橋班）	研 究 課 題 研究代表者	キンギョから見る知覚統合の進化的基盤 高　橋　　真（准教授・比較認知科学）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（田中班）	研 究 課 題 研究代表者	民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望 田　中　正　隆（准教授・社会学・社会人類学・民俗学・アフリカ地域研究）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（中野班）	研 究 課 題 研究代表者	社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究 中　野　加奈子（准教授・社会福祉学）
【2019～2021年度「科研費」採択】 一般研究（岩本班）	研 究 課 題 研究代表者	陽明学派の三教合一思想と皇帝政治 岩　本　真利絵（任期制助教・特別研究員）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（服部班）	研 究 課 題 研究代表者	「文豪」夏目漱石像と岩波文化の研究：小林勇旧蔵『漱石全集』編纂関連資料を用いて 服　部　徹　也（任期制助教・特別研究員）
【2019～2020年度「科研費」採択】 一般研究（田鍋班）	研 究 課 題 研究代表者	ハイデッガー「黒ノート」におけるユダヤ問題の研究－－形而上学批判を基点として 田　鍋　良　臣（本学非常勤講師・特別研究員）
【2019～2022年度「科研費」採択】 一般研究（上原班）	研 究 課 題 研究代表者	『四六文章図』研究－日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって－ 上　原　尉　暢（特別研究員）
【本研究】 一般研究（井黒班）	研 究 課 題 研究代表者	20 世紀初頭の山西省における水利会社の設立の経緯とその後の展開 井　黒　　忍（准教授・東洋史学）
【本研究】 一般研究（大原班）	研 究 課 題 研究代表者	〈省察的実践〉と〈よりそう支援〉の親和性に着目した支援モデルの研究 大　原　ゆ　い（講師・社会学）

【PD 個人研究】

研 究 名	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織	
個人研究（青柳班）	研 究 課 題 研究代表者	坂東本『教行信証』読解のための基礎研究 青　柳　英　司（PD 研究員・真宗学）
個人研究（大澤班）	研 究 課 題 研究代表者	近代日本の大衆文化における教祖像の研究 大　澤　絢　子（PD 研究員・宗教学・近代宗教文学）
個人研究（鍾班）	研 究 課 題 研究代表者	「孝」思想に基づく終末期医療の法と倫理－儒教文化圏における「善終」の実践と意思決定制度の変遷－ 鍾　　宜　錚（PD 研究員・生命倫理学）
個人研究（西村班）	研 究 課 題 研究代表者	第一次世界大戦前後のフランス政治思想とキリスト教－極右思想家とジッドの関係に注目して－ 西　村　晶　絵（PD 研究員・フランス文学）

2019（令和元）年度「一般研究」（新規採択課題）研究目的紹介

共同研究

モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究

研究代表者・教授　松川 節
（モンゴル学）

2015年６月にユネスコ世界文化遺産に登録されたモンゴル国の「大ブルカン・カルドゥン山」は、13世紀にモンゴル帝国を創建したチンギス・カンの生誕地かつ埋葬地と見なされ、現在に至るまで、モンゴル人にとって最も神聖な地とされている。チンギス・カンの陵墓を探す試みは、1990年代から様々な探査が行われてきたが、今も確証を得るに至っていない。本研究代表者の松川は、2016年より三年計画で科研費による日本モンゴル共同研究を実施し、「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」遺産に関わるチベット語とモンゴル語の山岳祭祀文書の分析を通してこの遺産をモンゴル宗教文化史上に位置付け、新たな知見を得た。本研究はこの成果をさらに発展させ、①大ブルカン・カルドゥン山とチンギス・カンを結びつける歴史資料及び現地伝承を博捜し、チンギス・カン陵墓所在地について歴史文献学的な結論を提示するとともに、②大ブルカン・カルドゥン山の保存・保護、観光マネジメントに関して文化遺産学的研究を行い、③この貴重な遺産を過去から未来へといかに継承していくかを共同研究によって明らかにすることを目的とする。その特色は、歴史研究を未来へとつなぐ点、研究成果の地域還元、国際社会における日本のプレゼンスの発揮にある。

2019年度は国内研究会を２回開催（６月15日㈯と10月19日㈯、於：大谷大学）して原典史料の会読とモンゴル側が提示している保存保護策の検討を行い、現地モンゴルでは①に重点を置き、現地資料と現地伝承の収集研究を行う。

共同研究

日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究

研究代表者・准教授　徳田 剛
（地域社会学）

少子高齢化の進行による人口減少局面を迎えた今日の日本社会において、労働力としての外国人の受け入れ拡充が大きな政策課題となっている。とりわけ多くの過疎地域を抱える日本の地方部においては、深刻な労働力不足に対して「外国人材」を充当しようとする動きがさらに加速化することが見込まれる。2019年４月に施行された改正入管法など出入国管理政策の変更が急ピッチで進む一方で、来住した外国人人口を「地域社会の構成員として」受け入れ、異国の生活環境への適応を助け、適切な形での社会参加・社会統合を実現するための諸施策の整備が著しく遅れている。

本研究では、これまでに取り組んできた「日本の地方部における多文化化対応」についての研究を発展的に展開するため、研究代表者・分担者・研究協力者を(1)「地方部における外国人住民の就労・生活・社会参加」研究班、(2)「地方部における多文化共生施策」研究班、(3)「地方政府の移民政策に関する国際比較」研究班へと編成する。それぞれの研究班において、先行研究や資料の収集と分析、各地での調査研究の実施と地域比較分析を分業的に進めつつ、全体として多角的かつ総合的な地方部における多文化化対応と多様な文化的背景を持つ構成員による地域社会づくりに向けた提言を行っていく。

本研究の大きな特色は、これまでに取り組んできた日本国内の地方部における地域比較の視点に加えて、新しい移民政策のフレームワークを構想する際に参照すべく、海外の移民政策の比較研究に取り組む点にある。具体的には、1）もともと血統主義的風土が強く、2）比較的最近に移民政策を刷新して基本法の制定と体制整備を行っている韓国、ドイツなどの移民政策を取りあげ、これらの国の基本的な枠組みと地方政府における運用状況の把握を目指す。

共同研究

中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究

研究代表者・講師　Michael J. Conway
（真宗学）

中国唐代初期において、道綽（562-645）により提唱された浄土教思想は、後世の中国仏教界のみならず、東アジア漢字文化圏において枢要の地位を占めるに至っている。しかしその一方、道綽に前後する曇鸞（476-542）・善導（613-681）に比し、道綽とその主著『安楽集』に対する研究の蓄積は少ない。また、そうした研究の殆どは日本浄土教各宗派の教義研究の域を脱していない。

そこで３年間の研究期間を通して、道綽その人と浄土教思想を、同時代の仏教界及びそれを取り巻く社会と思想的環境の中において捉え直し、特に『安楽集』を対象として、道綽の浄土教思想の独自性と革新性とを多角的に検証し解明することを目的とする研究プロジェクトを進める。

その目的を果たすために道綽研究に既に業績を残している次の５名の研究者が研究分担者として加わり、道綽の歴史的意義を学際的に明らかにする。大内文雄（大谷大学名誉教授）、大西磨希子（佛教大学教授）、齊藤隆信（佛教大学教授）、西本照真（武蔵野大学教授）、宮井里佳（埼玉工業大学教授）。この研究組織で、定期的に二種の研究会を開催することによって研究活動を推進する。

①本学を会場に二週間に一回程度で『安楽集』の詳細な英文と和文の訳注を作成するために非公開の研究会を開催する。この研究会において古写本調査による『安楽集』のテキスト確定、引用文献調査、研究史の整理といった作業を通して、『安楽集』を正確に読解し、専門用語に頼らない、幅広い層の人が読むことのできる『安楽集』の現代語訳を作成し、そしてそれに詳細な注を施す。

②年に６回ほど、道綽の研究、または隣接する分野に携わっている研究者を招聘し、公開研究会を開催する。2019 年度には研究代表者及び分担者の研究発表を中心にし、2020 年度以降は外部から講師を依頼し、道綽の研究を学際的に進めていく。

共同研究（予備研究）

系図・紋章からみる画像記号と文字データの同定・管理・可視化および表現手法の研究

研究代表者・教授　柴田 みゆき
（情報処理学）

本研究班は 2006 年より系譜・系図とその PC 上での表示について研究を継続してきた。この間、日本の系図史料から系図の特徴を考察し、系図表示ソフトウェアの実装を行ってきた。この過程で視認性よく、かつ簡便に系図を PC 上で表示させるアルゴリズムを導くには、系譜・系図の本質を考究する必要が生じてきた。

また、系図表示ソフトウェアがより汎用性の高いものになるためには、日本の史料や系譜・系図文化のみならず、諸外国の系譜・系図文化の特徴も反映される必要がある。

平成 26～30 年度、科研費基盤研究（C）26503015「紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析」（研究代表者柴田）において、これまでの研究成果と西洋の紋章に内在する系譜情報との比較を目指した。また、日本の系図では従来取り上げられてきた文章系譜・竪系図・横系図の様式のほか、これまで本格的な研究がない円形系図の調査にも着手した。

この他、系図表示ソフトウェアでは、マウス操作による半自動入力からデータを読み込んで自動表示させるための配置について理論化を試みた。

以上から、本研究の課題と目的は、次のようになる。①西洋の紋章についてロンドンを中心に調査を継続し、これまでの調査で得られた史資料を体系化して従来の紋章研究との比較検討を行う。②日本の系図について各様式の史料調査・分析を継続し、日本における系譜・系図の通史的検討を進める。③新たに、アジア諸地域の家譜について史料調査を行う。④PC 上の系図自動表示のための理論を検討し、データ入力フォーマットのモデル構築と、データの相互参照と活用の議論をあわせて行う。⑤日本国内の動物園の協力を得ながら動物個体の関係を調査し、生物系分野の視点から本研究の汎用性・有用性の検証を行う。

個人研究

タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響

研究代表者・准教授　西川 幸余
（応用言語学）

タスク・ベース言語指導（Task-Based Language Teaching）は、効果的な学習方法として注目されている。日本人英語学習者に適するタスク設定を『カスタマイズ』すること（松村、2017）は重要な課題である。外国語として英語を学ぶ日本人学習者のスピーキング力の向上に重要な点は、まず言いたいことを口に出して話せる状況を設定し、自信を持って話そうとする態度を身につけることである。授業で会話練習をする場合、補助教材となる「モデル・インプットの提示」が、学習者の会話量の増加に役立つことがある。また、対話者を変えて同じ内容について「繰り返し」会話練習を行うと、最初の発話より幾分か上手に話すことができ、流暢さや正確さの向上につながる場合がある。

本研究では、スピーキング・タスクの条件に、①「繰り返し学習」と、②「インプットの使用」を取り入れた場合、学習者の発話に変化が見られるか調査し、その効果を確かめることにより、言語習得に役立つ実践的なタスクの考案を目指す。また、スピーキングタスク終了直後に、タスク活動を振り返るインタビューを行い、学習者のタスク学習における気付きに関する調査を通じて、効果的な繰り返し学習の指導方法やインプットの役割について検討する。

平成30年度は、参加学生を募集し、スピーキングタスクに取り組んでもらい、タスク終了後、インタビューを実施した。本年度は、さらに参加者を募り、同様にスピーキングタスクとインタビューに取り組んでもらい、得られた英語発話データを定量分析し、インタビューデータを定性分析していく予定である。

参考文献

松村昌紀（2017）「タスク・ベースの英語指導－TBLT の理解と実践」大修館書店

個人研究

儒教文化で捉える「孝」の表現と終末期医療倫理の再構築
－日本と台湾の比較を中心に－

研究代表者・PD 研究員　鍾 宜錚
（生命倫理学）

本研究は、終末期医療における「孝」（日本の場合は「親孝行」）の表現に注目し、延命治療をめぐる意思決定と家族の葛藤を分析することで、患者の「最善な利益」や「自律の尊重」など従来の倫理原則とは異なる、「孝」の観点から捉える終末期医療のあり方と家族との関係性に基づいた倫理原則の提示を目的とする。儒教文化圏において、親に「善終（善い死）」を迎えさせることはしばしば究極の「孝」の表現として語られている。ここでの「善終」には、痛みをなくすことや、本人の希望が叶うなど、従来の「善い死」とされる概念が含まれる一方、「孝」のもとに結ばれた本人と家族との関係性の中に成し遂げられるべきという意味も内包される。本研究は、古典儒教で記された「孝」の概念が現代社会でどのように受容されたかを検討することで、終末期医療の法制化と「孝」の表現を考察する。具体的な課題は以下の通りである。

①法制化の議論に見られた「孝」の内実の変容：国会議事録や法制化の関連資料を分析し、「孝」に関連する発言を中心に考察する。台湾では、延命治療の差し控えは「自然死」としてみなされ、親を「自然死」させることが「孝」の表現として見られる一方、法律の改正につれて、延命治療の中止も「孝」の表現として語られるようになった。法制化をめぐる「孝」の解釈の変化を考察し、その多義性を指摘することで終末期医療における「孝」の意義を明らかにする。

②終末期医療における「孝」の語りと表現：小説、映画、演劇など一般的に流通する作品を分析し、とりわけ終末期医療をめぐる意思決定の場面において、親が子を思い、子が親を思うような感情はいかに描写されていたのか、「孝」をするには不可欠な要素と表現について明確にする。

個人研究

Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English
小学校で英語を担当する教師に向けてのクリティカルな実践共同体の構築に向けて

研究代表者・准教授　Ryan W. Smithers
（英語教育学）

2013年に文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表しました。それに伴い、2020年度より小学校５、６年時に英語が教科として、小学校３、４年時には英語が外国語活動として導入されます。しかしながら、教員養成の不整備、小学校と中学校の英語のカリキュラムの不明確な連携、財源及び人材不足などの課題は山積みです。小学校では英語を教えることに対する経験、ノウハウが不足しているにもかかわらず、いつ、どのように、何を教えるかは各学校に一任されています。

本研究の目的は小学校の英語教育の実態調査及び小学校で英語を担当する教師が英語を教える上で何を必要であると感じているかを調査することです。京都市内の159校の小学校を対象に現在使用されている教材、その内容を分析し、教師へのインタビューを通してどのような教材（resource）、専門的支援（professional support）が適切及び効果的であるかを調べ、何が不足しているかを探究します。この結果を基に、小学校教師のために教材、専門的支援をオンラインで提供し、教師のクリティカルな学びを促すための持続可能および適切な実践共同体（community of practice）としてのオンラインスペースの構築を目指します。

本研究の成果が高等教育機関、教育委員会、文科省が目指す小学校英語教育向上のためにどのように貢献できるか、その指針となることを望んでおります。

個人研究

キンギョから見る知覚統合の進化的基盤

研究代表者・准教授　高橋 真
（比較認知科学）

人間は異なる感覚情報を統合して知覚することがある。その代表例が共感覚である。特定の数字に対して特定の色が自動的に見えるといった特殊な事例だけでなく、「明るい音」・「暗い音」、「鋭い音」・「鈍い音」といった感覚間のマッピングも、共感覚的な知覚として考えられる。共感覚のメカニズムの解明は、認知科学の重要なトピックである感覚の統合過程や美観のメカニズムの解明にもつながる。

共感覚的知覚はヒト言語を媒介として表現されているが、Takahashi & Taniuchi（2015）は、共感覚的知覚がヒト以外の種、特に、水中生活種のキンギョにも存在する可能性を示した。ただし、その統合過程が同一であるかどうかまでは検証されていないため、ヒトとキンギョで示された知覚の統合過程が同じであるかどうかを検証する必要がある。

ヒトの比喩に用いられる共感覚的表現は方向性があることが知られているが、ヒト以外の種の共感覚でこの方向性は検討されていない。ヒトの共感覚的知覚の進化的基盤が魚類にあるならば、キンギョの共感覚的知覚の方向性の有無、および、方向がヒトと共通するはずである。そこで、本計画では、ヒトとキンギョの共感覚的知覚において感覚の方向性に共通性が存在するかどうかを検証する。

具体的には、特定の視覚刺激（もしくは、聴覚刺激）の弁別課題の遂行中に、弁別刺激と一致する刺激とそうではない刺激を提示することで成績に変化が生じるかどうか、また、そうした影響が弁別刺激と妨害刺激を変えても生じるかどうかをキンギョとヒトで比較する。それにより、ヒトの共感覚的知覚の進化的基盤を明らかにし、感覚統合の基礎過程を明らかにする。

（引用文献）

Synesthesia-like perception in Goldfish. Takahashi, M., & Taniuchi, T.『動物心理学研究』, 65巻, p.158, 2015.

個人研究

民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望

研究代表者・准教授　田中 正隆
（社会学）

2000年代以降、アフリカ諸国では旧世代の元首の引退や三選禁止の選挙制度によって、政界の世代交代がすすんでいる。それはベナン、トーゴ、セネガル、ブルキナファソといった仏語圏西アフリカでも顕著である。だが、変動期にあっても、アフリカでは年長者や一部の政治サークルによる政策決定権の独占がつづき、一般民衆は政治論議に参加できなかった。アフリカは二十代の年齢層が多数派となる「若い大陸」と呼ばれてきたが、エスニック、年長者、利権における既存の優位集団の制約から、とりわけ若者層は、表舞台の順番がくるのを延々と待ち続ける待機状態waithoodにおかれてきた。

近年、アフリカ経済は、資源開発への投資や援助対象ではなく、中間層のマーケットをめぐって、中国やインドなどの進出がめざましい。政治では、長期政権の崩壊と次代への交代がおき、社会環境では、新たな情報機器が流通して教育や就業機会が広がっている。こうしたなか、アフリカの若者が、いま、声をあげ始めている。若者層の街頭デモ行進や集会で、社会不安について意見表明がなされ、メディアの参加型番組やファン・コミュニティ（友の会）が若者の不満を包摂する場となっている。そして、従来の暴力性とは異なり、社会運動の新たな表現形態であるサウンドやパフォーマンス、ペインティングなどがアフリカでも生じている。こうした動きが社会変化のきっかけともなってきた。

だが、世界的にも共通性をもつ、こうした新たな社会運動と世代交代について、なおも事例研究が不足しているのが現状である。そこで、アフリカの民主化前後に生まれた二十～三十代の人々を「若者」として焦点化し、政権の世代交代にともなって、社会変革を求めて胎動する若者層の活動と今後の展望を、本研究で明らかにする。産業化が進んだセネガルと、民主化において対照的なベナン、トーゴの事例を比較検討し、総合研究を展開する。

個人研究

社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究

研究代表者・准教授　中野 加奈子
（社会福祉学）

「ソーシャルアクション」とは、問題解決に必要な制度・サービス創出と、問題を生み出す社会構造に働きかけ、問題を発生させないように社会変革することである。この「制度・サービスの創出」および「社会変革を志向した社会構造への働きかけ」を実現するための、署名・陳情・裁判・連携といった具体的な活動を表す。

近年では「年金引き下げ違憲訴訟」や「生活保護基準違憲訴訟」など1000人単位の原告を有するソーシャルアクションが展開されている。このような活動に関与する当事者や市民は、今日のソーシャルアクションにおいて重要な役割を担っている。また、社会福祉学会の共通テーマとして「21世紀の社会福祉」と「運動性」が取り上げられるなど、ソーシャルアクションへの関心は高まっている。

その一方で、専門職ソーシャルワーカーや職能団体は、問題への声明文は出すが、陳情や裁判などの具体的活動に積極的に関与する姿は少ない。今日の専門職ソーシャルワーカーは、制度によって配置や業務内容が規定されているため、ソーシャルワーカー自身の裁量範囲は縮小し、ソーシャルアクションに関与する「当事者」として活動を行いにくい。

こうした状況を改善するため、本研究ではソーシャルアクションに関与した人々の生活史を通して、(1) ソーシャルアクションの担い手の動機付け、(2) ソーシャルアクションの具体的活動内容、(3) 海外のソーシャルアクション関与者と我が国の状況の共通点・相違点、という３つの課題の明確化に取り組む。本研究の独自性・創造性は、生活史の聞き取りから、ソーシャルアクションの内部状況（人々が何を考え、なぜ・どのように行動したのか）を分析することにある。さらには、当事者組織化の方法と意義も検討ができると考えている。

これらの分析を通して、「制度の狭間」「声を出せない状態」に陥りがちな人々に対するソーシャルワークの可能性について検討していく。

個人研究

陽明学派の三教合一思想と皇帝政治

研究代表者・任期制助教　岩本 真利絵
（東洋史）

中国明王朝（1368～1644）の創設者太祖朱元璋（在位：1368～1398）は宗教結社の反乱に身を投じて皇帝位を獲得したという出自から、儒教の枠にとらわれない儒教・仏教・道教を混淆した三教合一思想を有していた。しかし、明代前期の儒者たちは儒教的価値観により太祖の三教合一思想に関する記載を史料から抹消しようとし、明代前期から中期にかけての史料では太祖は儒教的価値観の体現者として記述される。その後、明代後期に三教合一思想が流行するようになると、儒者の一派である陽明学の影響を受けた思想家たちが太祖を三教合一思想の集大成として尊崇するようになる。太祖の三教合一思想と明代後期の三教合一思想の関連性については、これまでにも多くの研究者によって注目されてきたが、太祖のイメージが儒教的価値観の体現者から三教合一思想の集大成に変容したという事象が何を原因とするのかについては解明されていない。

本研究では太祖の著作を集めた書籍『御製文集』出版事業を切り口として、その出版の経緯、出版者たちの来歴と人脈、当時の政治との関連性を検討することで、太祖のイメージの変容過程を解明する。具体的には陽明学派による『御製文集』揚州本の出版（嘉靖十四年、1535）を画期として位置づけ、揚州本の登場により三教合一思想における太祖のイメージがどのように変化したのか、また、その変化をもたらした政治的背景はどのようなものだったのかについて、出版者たちの政治的立場と当時の皇帝の政治姿勢を検討することで明らかにする。そして、個々の皇帝の三教合一思想に対する融和的な態度が明代後期の三教合一思想の隆盛という状況を生み出したことを実証することを目的とする。

個人研究

「文豪」夏目漱石像と岩波文化の研究：小林勇旧蔵『漱石全集』編纂関連資料を用いて

研究代表者・任期制助教　服部 徹也
（日本近代文学）

日本の「近代文学」イメージは、「学問」の権威を背景に形成されてきたといえる。そこで本研究は、夏目漱石没後に学者かつ作家という「文豪」漱石像を作り出した、日本最長の伝統をもつ個人作家全集『漱石全集』（岩波書店）に注目する。

2013年に、1924年版・1935年版『漱石全集』の編纂過程を克明に記録した岩波書店内部資料（岩波書店創業者岩波茂雄旧蔵、その後小林勇が保管）の存在が明らかになった。この1924年版・1935年版『漱石全集』は、改造社の『日本現代文学全集』（円本）ブーム（1926年～）、岩波文庫創刊（1927年）、岩波新書創刊（1938年）と相前後する書籍の廉売、文芸学術の普及・大衆化が進んだ時期の重要な出版物である。しかし、この資料には未整理の部分があり、資料の劣化も心配されるところであった。

そこで本研究では、出版が大衆化・廉売化する1930年代に、漱石と岩波書店が、いかにして学問の権威をまとい、高級な文化というイメージを形成しえたのか、「文豪」漱石像と岩波文化がどのように支え合って形成したのかを明らかにするため、同資料をもとに『漱石全集』編集にあたった当事者側の意図や背景知識、編集体制の内実を分析する。その際、岩波茂雄・小林勇旧蔵『漱石全集』編纂関連資料を整理・撮影し、監修者小宮豊隆や1920～30年代の英文学研究者らの著述を参考に分析する。

さらに、『漱石全集』などの文学全集の編纂過程を具体的に分析すること通して、近代文学研究の方法（本文校訂、注釈、解説など）がドイツ文献学などの影響をどのように受けて確立していったのかを明らかにする。1920～30年代の全集編纂過程を解明する本研究の成果は、全集編纂への参画を通して自立した研究領域として体系化を進めた日本近代文学研究の源流に遡ることになる。初期の日本近代文学研究がなぜ作家研究に偏ったのかという学問史上の課題を明らかにすることにつながると考えられる。

個人研究

ハイデッガー「黒ノート」におけるユダヤ問題の研究 －形而上学批判を基点として

研究代表者・特別研究員　田鍋 良臣
（宗教哲学）

ハイデッガーの遺稿「黒ノート」が2014年春に刊行されて以来、そこに記されていた「ユダヤ（教）Judentum」に関する批判的な文言が反ユダヤ主義のステレオタイプにあたるとされ、ハイデッガー・アフェアと呼ばれる騒動に発展している。とりわけ非難が集中するのは「計算的思考」という概念がユダヤ（教）に結びつけられている点である。はたしてそれは、ハイデッガーの存在史的思索において何を意味するか。反ユダヤ主義という評価をひとまず括弧に入れつつ、本研究は、「黒ノート」のユダヤ批判を計算の問題に即して整理・分析することで、それが第一義的には、歴史的な背景をもった形而上学批判であることを明らかにする。

本研究遂行の鍵となるのは、ハイデッガーが、ユダヤ（教）をキリスト教と一体のものとして「ユダヤ-キリスト教」と捉えている点である。これとの連関で注目すべきは、フィロンとイエスに関する考察である。ハイデッガーによれば、フィロンはユダヤの創造神話をギリシアの形而上学に結びつけることで、キリスト教神学の礎を築いた。他方でイエスの神経験は、こうしたユダヤ-キリスト教のギリシア化以前に位置づけられ、そこに信仰経験を形而上学的な規定から解放する可能性が見出される。ユダヤ-キリスト教のギリシア化をめぐるこれらの解釈を検討することで、本研究は、計算の問題を含むハイデッガーの形而上学批判のうちに、信仰擁護という積極的な狙いがあることを浮き彫りにする。本研究を通じて、ハイデッガーの知られざる宗教哲学的な思索に光をあてるとともに、「黒ノート」をめぐる現在の研究状況に対し、一石を投じる契機としたい。

個人研究

『四六文章図』研究 －日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって－

研究代表者・特別研究員　上原 尉暢
（中国文学）

日本中世を代表する五山文学では、中国の唐宋詩や唐宋八家文のような漢詩文が盛んに受容され、同時にその「読み書き」を指南する文章指南書・作法書も数多く制作された。これにより漢詩文に対する「読み書き」のあり方が体系化され、後の近世の漢詩文隆盛の呼び水となった。こうした五山文学のあり方が近年の日本漢文学史研究において再認識され、それに関わる文章指南書・作法書についての研究が大いに進められている。

その一方で、唐宋詩文の文体とはやや異にする、中国の六朝期に盛んに制作され完成をみた、駢体（駢文）の文体も、唐宋期には公的な場における文体として定着し、一定の影響力を持つようになっていた。それは一般社会のみならず禅宗寺院にも及んでおり、さらにはその中国の禅林を模範とした日本の五山の禅林でも、同様に駢体を用いた文書が数多く残されている。またそうした駢体の文書の読み書きに関わる文章指南書・作法書の類いも中世から近世期に幾つか制作されており、日本漢文学史研究に貴重な資料を提供している。ただ現在の研究では、駢体の文書や文章指南書に関する研究は端緒についたばかりであり、その性質や意義については、今後の解明が待たれるところである。

本研究で取り上げる、江戸初期の臨済宗の僧侶、大巓（1629～1685）の撰になる『四六文章図』は、上述の駢体の文章指南書や作法書を集大成したとされるものである。本研究ではこの『四六文章図』の内容や特質を解明するために、詳細な訳注を作成する。また本書に関連する、先行する他の文章指南書・作法書のみならず、国外の文章作法書や指南書との比較を通して、日本のみならず東アジア漢文文化圏における本書の意義や、ひいては駢体という文体が日本漢文学史上、あるいは東アジア漢文文化圏史上に果たした文化的意義について明らかにすることを目的とする。

個人研究（本研究）

20 世紀初頭の山西省における水利会社の設立の経緯とその後の展開

研究代表者・准教授　井黒 忍
（歴史学）

前近代中国において、公権力は水資源の管理に直接には介入せず、地域社会がその任を担った。こうした地域社会が資源の管理・運営の主体となるあり方は、現在ではセルフ・ガバナンスとも称され、一種、理想的な形態であるともみなされる。しかし、伝統的な水利規定や水利組織により形成された水利秩序は、社会内部における階層性を含み込み、それを補完し助長するために維持されるという一面を持つものでもあった。

こうした状況が大きく変化するのが、19 世紀から 20 世紀初頭の近代移行期である。全国的には西欧で発達した会社組織が導入され、各種製造業や金融業の分野において株式会社が設立される中、20 世紀初頭の山西省北部においては全国に先駆けて複数の水利会社が設立された。これらは株式会社の形態をとり、灌漑を目的とした水利事業を推進するのみならず、水資源の管理主体ともなった。これにより、同一地域内において旧来の伝統的な水資源管理方式と水利会社による新たな管理方式とが並存するという状況が生まれることとなる。こうした多様な水資源管理のあり方が、当該地域の社会構造や地域社会の歴史的経験を反映するものであるとともに、自然環境的条件を前提とするものであったことは間違いない。

本研究は、近代移行期の山西省北部において水利会社が設立された社会的背景および自然環境的背景を明らかにすることを目的とする。これにより、伝統的な水資源管理方式が有した課題や問題点を浮かび上がらせるとともに、企業による水資源管理という方式が持つ可能性や問題点を指摘する。市場経済の下におかれた水資源および水利権がいかなる変化を起こしたのかという歴史的経験は、現代の水ガバナンスにおける企業の果たす役割と地域社会との関係、さらには水利事業の民営化という問題を考える上でも示唆を与えるものとなると考えられる。

個人研究（本研究）

〈省察的実践〉と〈よりそう支援〉の親和性に着目した支援モデルの研究

研究代表者・講師　大原 ゆい
（社会学）

複雑化・複合化する現代の地域社会で生じる福祉問題は、従来の社会福祉制度や専門職制度の枠組みだけでは問題の所在や、解決のための道筋を見つけにくい状況にある。本研究のキーワードである〈よりそう支援〉とは、このような状況のもとで、福祉問題を抱える当事者とともに解決方法を考え、行動し、必要に応じて社会資源を作り出し、社会変革をも視野に入れた実践に取り組む福祉専門家による地域福祉実践のことである。本研究では、ドナルド・ショーン（1983）の提起する「省察的実践者」という専門家像を手がかりにして、〈よりそう支援〉が対象とする問題状況や場面、誰がどのような社会資源を用いて取り組んでいるのか、また従来の支援スタイルとの相違点、さらに支援に携わる福祉専門家の養成教育のあり方を明らかにする。このように、福祉実践家を省察的実践者として捉え、〈よりそう支援〉の構造分析を行うことで、現代社会からの要請に応じた福祉実践家像の提示が可能になると考える。

以上の問題意識をふまえ、本研究では、地域福祉実践および福祉専門家養成教育の現場で懸念されるソーシャルワークの危機を背景に、「今日的な福祉問題」への対応として〈よりそう支援〉を捉える。そして、〈よりそう支援〉の構造分析を通して、これからの支援モデルと福祉実践家像およびそれら実践を担う実践者を育成する教育プログラムの提示を目指す。具体的には、〈よりそう支援〉に取り組む実践者を対象とした①フィールド調査およびインタビュー調査による地域福祉実践の分析、②テキストマイニングおよびタイムスタディの手法を用いた福祉実習記録のデータ解析による福祉専門家養成教育の現状と課題の検証、③〈よりそう支援〉の担い手としての実践者養成を視野に入れた福祉専門家養成教育プログラムの提案について検討する。

海外学会参加・研究調査報告

第５回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究（英米班）研究代表者・講師　Michael J. Conway
博士後期課程真宗学専攻第二学年　鶴留 正智
博士後期課程仏教学専攻第二学年　澤﨑 瑞央
博士後期課程真宗学専攻第一学年　本多 正弥
修士課程真宗学専攻第二学年　Yul Otani

大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定に基づく『歎異抄』翻訳研究プロジェクトが続いている。第５回目のワークショップは、カリフォルニア大学バークレー校がホスト校を勤め、2019 年３月１日㈮から３日㈰までカリフォルニア州バークレー市にある浄土真宗センターにて開催された。三校の教員と大学院生に加えて、米国仏教学院の教員や学生、北米で活躍している東西両本願寺の開教従事者、他大学に所属する若手研究者等、約 25 名が集い、４班に分かれて、江戸期に作成された『歎異抄』の注釈書の英訳作業を共同で行った。また、『歎異抄』について研究発表も行われた。

本研究プロジェクトの目的の一つは、次世代の研究者の育成にあり、三者協定に基づき、本学では大学院生に対して募集し、参加に際しての旅費補助を行った。旅費補助を受けた学生から提出された参加報告書を下記に掲載することで、ワークショップの様子を共有するとともに、参加した大学院生がその経験を通して何を学んだかを示したい。

真宗学専攻に所属し、国際仏教研究の研究補助員を勤めている鶴留正智の報告書は以下の通りである。

このワークショップに参加するのは今回で５度目、報告書の執筆は３度目になる。

今回はワークショップに先立って、私は国際仏教研究班の研究補助員としてそれぞれの翻訳グループの成果を先生方に提出してもらい、それを共有した。すでにいくつかの班では Google Drive をベースにして翻訳ドキュメントを作成していたのだが、ネイティブアプリで文書を作成する班もあった。今回、ネイティブアプリで文書を作成していた班からも文書が共有され、既存の Google Drive フォルダも共有範囲を拡大し、いつでも翻訳成果にアクセスできるようになった。

前回に引き続き円智、寿国、深励、了祥の４班に分かれ、グループワークで翻訳作業を進めた。了祥班はこれまで担当していただいていた井上尚実先生が参加不可能であったため、桑原浄信先生に了祥班を担当していただいた。桑原先生は龍谷大学で博士の学位を取得された後、現在は Buddhist Churches of America 等で勤務されており、カリフォルニア州に在住している。真宗学の見識も深く、かつ英語も堪能で、ふさわしい方に担当していただいた。

今回のワークショップで感じた課題として、大谷大学大学院以外の院生が少なかったことが挙げられる。１度目のワークショップはイースター休暇の時期であったし、バークレーで開かれた２度目のワークショップは前日にシンポジウムが開かれたこともあって、今回よりも参加者が多かったように思う。すなわち日本語話者よりも英語話者の方が多い印象を受けていたのだが、今回は日本語話者の方が多かったのではないだろうか。アメリカのイースター休暇の時期は本学のオリエンテーション期間と重なるという問題はあるが、しかし親鸞、真宗史研究を多面的に進めるためには、さまざまな大学院生にこのワークショップに参加してもらうことが重要である。できるだけアメリカの大学院生が参加しやすいワークショップにしていく必要があると痛感した。

了祥班の様子

次は仏教学専攻の澤﨑瑞央の報告書である。

歎異抄ワークショップには、前回から参加し、今回は初めてのアメリカ、バークレーの JSC（浄土真宗センター）での参加となった。皆、温かく迎え入れてくださり、想定以上の歓迎に驚かされた。研究及び翻訳作業の進捗に関して他の報告書に譲り、この報告書ではワークショップがどのような環境、日程で行われたかを述べたい。

バークレー、大谷、龍谷大学の先生たちが中心となり、各々の大学院生と GTU（宗教大学院連合）に所属する学生に加え、JSC で支援してくれる方々も参加する形で翻訳作業は行われた。教義的な側面ではなく、英語としての整合性や、説明に背景を必要とする箇所を指摘してもらえる方々がいたことは有意義だった。また、今回は、グループによって人数の隔たりが起きてしまうことや、専門的な内容に関する英語表現の難しさも切に感じた。大学院生の英語力の向上とともに、参加する学生を増やし、さらに積極的に母語が英語である方に参加してもらう必要性を感じた。

ワークショップの日程に関して、第一日目が始まる前に、大谷大学修士課程で真宗学を学び、現在はバークレーの GTU に所属している和田良世さんが暮らしている寮のパーティーに招待していただいた。そこには、若手の宗教系の研究者が集まり、ワークショップに参加する人も多く来ており、お互いの研究内容や大学、ワークショップに関して様々な情報交換を行った。期間中は、二日目のレストランでの会食を含め、JSC で支援してくれている方々も含むワークショップに参加する人たちと食事を共にし、『歎異抄』及び翻訳に関する話題で盛り上がった。筆者は、JSC の方々のホスピタリティ溢れる行動に際し、質問を投げかけてみたところ、同じ仏教、親鸞の教えを実践していく人たちであるという答えを頂いたことが最も印象に残っており、身が引き締まる心持となった。

今回のワークショップにおいても、様々な面において、多くの刺激を受け、『歎異抄』及び真宗の教義に対する理解の深まりが感じられた。今回得た課題を認識しつつ、様々な視点のもと、共同で行われる翻訳作業が、これからより有意義なものとなっていくことが期待される。

寿国班の様子

そして真宗学専攻の本多正弥の報告は次の通りである。

第５回『歎異抄』翻訳研究ワークショップが３月１日㈮から３日間、バークレーの浄土真宗センターで開かれた。

私は今回が４回目のワークショップ参加となり、４回とも全て了祥班として携わらせていただいた。そのため今回は了祥班の進捗状況と課題を報告する。

まず、進捗状況については、『歎異抄』第５章まで終えることができた。龍谷大学で開かれた第４回ワークショップで翻訳した第４章の再検討を１日目に行い、２日目は事前に大谷大学の勉強会でまとめた第５章をネイティブスピーカーの方にチェックしていただきながら翻訳し直した。そして、３日目は第６章の読み合わせを行い、内容の確認や了祥の註釈を現代語に直しながら考え直すという作業を行った。了祥班はこれまで大谷大学の井上先生が担当されていたが、今回は業務のため、桑原先生に担当していただいた。

次に課題について報告する。これまでも何度か話題に挙がっていたのだが、了祥班の翻訳の進め方を改めて考え直すということが一番大きな課題である。了祥班は他の円智・寿国・深励の班とは違い、テキストを全訳するのではなく要点のみをピックアップして翻訳するという方法を採ってきた。その理由はいくつかある。まずは了祥著作の註釈書が他の班に比べて圧倒的に多いということが挙げられる。また、註釈書によって了祥の意見に違い（展開？）があり、どの註釈書をメインに扱うか決めにくいこと。これについては、最晩年の註釈書が各章ごとの註釈ではないことや、いつ書かれたものかわからない著作があることも原因の一つである。これらの理由から了祥班はピックアップしたものを翻訳する方法を採ってきたが、ピックアップする箇所が編集者の主観が入っているなどの問題もあり、改めて考え直さなければならないと感じた。もちろん良い点もあり、了祥は他の３人と比べて最も時代が新しいため、他の３人の意見を踏襲して註釈している箇所がいくつもある。これらをピックアップすることでわかりやすさという点は肯定的に捉えることもできると思う。しかしその場合は、了祥の意見がフットノートのような位置付けになることが否めない。これらの問題を第６回ワークショップまでに修正することが課題である。

最後に、私個人は今回のワークショップで「歎異抄の著者問題」について大谷大学から一緒に参加した大谷さんと発表させていただいた。現在定説とされている、唯円を『歎異抄』の著者とする考えが、どのように唱えられたのか、またそれまではどのような説が主流であったのかなどを先行研究をまとめる形で発表した。貴重な機会をいただけたことに心から感謝している。

最後に真宗学専攻の修士課程に在籍している Yul Otani の報告を紹介する。

2019 年３月にバークレー浄土真宗センターで開かれた第５回「『歎異抄』翻訳研究ワークショップ」に参加した。そこで江戸期の『歎異抄』の注釈書を分析し、英訳の作業を行った。

翻訳作業以外に、私と本多正弥氏は「An overview of the Tannishō authorship problem」というテーマで共同発表を行った。発表では覚如説・如信説・唯円説を通して『歎異抄』の著者問題を英語で紹介をした。その後、様々な質問・指摘を受け、さらなる議論を進めた。特に、Mark Blum 氏は前述の三者以外の著者の存在について質問をしたが、本多氏は谷川守正氏の顕智説を述べた。その説は学術的に広く受け入れられていないが、発表ではその質問から議論が展開し、Blum 氏からは善鸞義絶と如信説の相克の指摘を受けた。また大澤絢子氏と Michael J. Conway 氏からは唯円説と近代歴史背景の関係について指摘を受けた。これらの課題については今後取り組むこととする。

他の発表では Michihiro Ama 氏は「Literary representation of Buddhist funerals」という題目で発表した。そこでは主に夏目漱石の作品『坑夫』や『彼岸過迄』を取り上げて、葬儀が文学的にどのように描かれていたかについて分析した。この発表の背景としては、現代アメリカにおける Chaplaincy の流行、葬儀と古代仏教の対立に関わる議論、そして葬儀の感想に関する資料が残されていないことなどが挙げられる。Ama 氏は、「道 path」というキーワードを用いて仏教思想、通過儀礼論、物語論と関連付け、夏目漱石の仏教観について述べた。

翻訳作業、発表、そして参加者との交流を通して、現代西洋社会における真宗学の課題を再び認識し、以後も自分が取り組むべき課題もより明らかに認識できた。

Otani・本多の発表の様子

以上の参加報告から見て取れるように、継続的にワークショップに参加する大学院生が定着し、大学間の交流が深められ、様々な形で参加している学生は刺激を受けて、国際的な場で真宗に関連する研究活動を推進する能力が培われてきている。また、龍谷大学と大谷大学に所属している学生と若手研究者が一つの目的に向かって共同作業に取り組んでいることを通して、教学上の類似点と相違が広く学生間で認識され、今後、国内の研鑽と交流も期待される。そして、学生が国際的な場で英語による発表を行い、質疑応答の際に議論に積極的に参加し、研究者として重要な経験をしている。

一方、学生が指摘しているように、本プロジェクトはいくつかの重要な課題を抱えており、その解決に取り組む必要がある。第５回のワークショップで特に目立ったのは、英語を母国語としている参加者の少なさであった。私が担当している深励班には、日程を通して英語を母国語としている参加者は私一人であった。そのような偏りを修正するために、どのような工夫ができるかについて検討を加えたいと考えているが、第６回の参加募集に対して、日本国外の大学の大学院に在籍されている学生から多数の参加申込があり、関心が高まっているようにも見受けられる。

第６回のワークショップは６月 21 日㈮から 23 日㈰にかけて、本学を会場に開催された。折返し地点に達した今、課題を認識し、10 回目までの開催で良質な研究成果を発表できるように工夫していく必要がある。

アメリカ哲学会中部部会　参加・発表報告

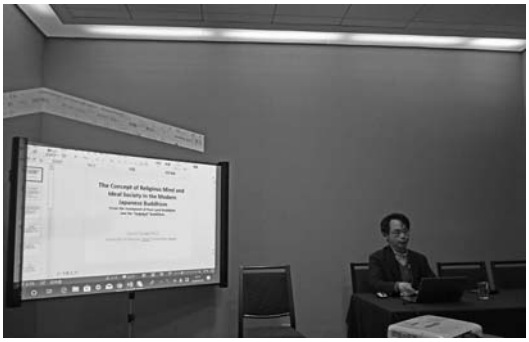
国際仏教研究（英米班）研究員・准教授　田中 潤一

2019年2月20日㈬から23日㈯まで、アメリカ合衆国コロラド州デンバーにて開催されたアメリカ哲学会中部部会　第116回大会に参加した。開催場所はデンバー市内 Westin Denver で行われた。2月22日㈮に学会発表を行った。発表時間は20:20〜21:00。発表タイトルは The Concept of Religious Mind and Ideal Society in the Modern Japanese Buddhism －From the Standpoint of Pure Land Buddhism and the Hokekyō Buddhism－。以下発表概要を述べる。

本発表では近代日本思想において、浄土教思想と法華経思想がどのように影響しているかを論じた。とりわけ京都学派の西田幾多郎、田辺元において浄土教思想が影響していることを指摘し、近代の日本哲学が浄土教思想から大きな影響を受けていることを論じた。同時に曽我量深の思想も考察した。宗教心のみならず、理想的な国家・社会形成の議論が、仏教思想の影響を受けながら展開されている点に重点を置いて発表した。発表の流れは以下のように行った。①「近代日本における仏教の状況」、②「浄土教の近代化」、③「仏教の新しい哲学的体系」、④「京都学派と浄土教思想」、⑤「法華経思想の立場から見た理想社会の形成」、⑥「二つの異なる仏教思想とその可能性」。

①まず近代日本における仏教の状況について、廃仏毀釈以来明治政府が神道重視の立場をとったことから仏教の立場が弱まったことを述べた。②においては、浄土教思想が本来どのような意義を持っていたのかを歴史的に述べると同時に、その意義について哲学的に論じた。③においては、近代日本の仏教において浄土教思想がどのように進展を遂げたかを述べた。とりわけ宗教心と理想社会の形成という観点から考察を行った。とりわけ「理想社会の実現」について、浄土教と法華経のそれぞれの理想国家の相違について論じた曽我量深の論文を検討した。曽我によると、法華経では理想国家を現実世界において実現させるように説いている。しかし浄土教では現実世界ではなく、一人ひとりの内面的世界、宗教心において理想国家を実現するという論が導き出される。曽我は法華経思想の意義を認めつつも、個々人の内面的世界を重視する立場を述べている。④では京都学派の西田幾多郎と田辺元の思想について論じた。とりわけ田辺哲学では、宗教心と理想社会の形成が独自の立場から論じられている。絶対的なものは彼岸的に存するのではなく、我々の一瞬一瞬の心の中に存しているとされる。また理想社会についての田辺の独自の哲学を考察した。一人ひとりの人間が独立して自らの道を歩む姿が「菩薩」と名付けられ、菩薩である個々人が共同体を形成するプロセスが論じられる。この共同体が「如来」と名付けられる。⑤では、法華経における国家論、とりわけ『従地湧出品』などで述べられている理想国家論について考察した。しかしながら近代日本の哲学者たちが浄土教思想については自らの哲学に援用するのに対して、法華経についてはほとんど言及していないことについても論じた。⑥では本発表を通じて、仏教思想が今後の哲学に寄与する可能性について論じた。

発表は25分程度であったが、質疑応答が15分ありいくつかの質問が寄せられた。アメリカにおいて禅についての仏教理解は相当進んでいるものの、浄土教思想についてはあまり深くなく、法華経についてはほとんど知られていないことが伺えた。今後より一層仏教の国際交流を図っていくことが重要と感じられた。



筆者の発表の様子

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく海外研究調査報告

国際仏教研究（東アジア班）嘱託研究員・准教授　井黒 忍

真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく共同研究のため、2019年３月３日㈰から７日㈭までの間、浅見直一郎教授ならびに岩本真利絵任期制助教の２名を特別招聘者として中国社会科学院歴史研究所に派遣した。派遣期間中においては、碧雲寺や于謙祠などの北京市内の史跡を訪ねたほか、中国国家図書館にて資料調査を行った。また、３月５日㈫には、中国社会科学院歴史研究所において研究会が開催され、浅見直一郎教授と岩本真利絵助教が研究報告を行った。両報告の概要は下記の通りである。

浅見直一郎「４～8世紀の日本における中国文化の受容－最近の研究を中心として－」。日本の中国史研究者には、本国の研究者とは異なる問題関心がある。それは、日本の歴史が長期にわたり、中国の文化を受容・消化してきた歴史という一面をもつことに起因する。すなわち、日本の研究者にとって、中国の研究は自らの歴史と文化を知る上で必須のものなのである。日本では、８世紀初期に中国文化受容の成果が形となってあらわれた。本報告では、それに先立つ時代、中国文化はどのように受容されていったのかという観点から、日本古代の墓誌を検討した。日本の墓誌は、船王後墓誌（668）から紀吉継墓誌（784）まで、わずか17例を数えるのみである。同時代の中国では、石を素材とし、表現に工夫をこらした文章を彫った墓誌が盛行していたが、日本の墓誌はそれとは異なり、多くは金属板や金属の納骨容器（骨蔵器）に文字を彫ったものである。中国の墓誌に近づけようという意志が汲み取れる例もあるが、それをそのまま忠実に受容したわけではなかった。受容できなかった、というべきかもしれない。巨大古墳が終焉を迎えて薄葬化が進み、仏教の影響で火葬が行なわれるようになったことを背景として、選択的に、また可能な範囲で中国文化を受容したのである。このほか、日本における最近の研究成果として、土木技術の研究と、古墳の被葬者についての研究を紹介した。

岩本真利絵「管志道の思想形成と政治的立場－万暦五年張居正奪情問題とその後－」。明末の三教合一の思想家として知られる管志道が思想家として知られるようになる万暦20年より前の事績を整理し、思想形成と政治的立場の関係について報告した。先行研究では管志道は万暦５年（1577）の内閣首輔張居正の奪情を批判したために張居正の怒りを買って政治的に挫折し、以後は政治から離れて学究生活を送っていたとされていた。しかし、管志道の奏議『奏疏稿』の序文を検討したところ、管志道は奪情問題で張居正を直接批判することはできずに保身を重視し、張居正没後は同郷の大臣である王錫爵の官界復帰を契機として自身の復職活動を行っていたことがわかった。本報告では、『奏疏稿』の版本と各序文の紹介、序文で描かれた奪情問題における管志道の活躍、張居正死後の管志道の復職活動と『奏疏稿』序文の関連性、管志道の政治人生と王錫爵の浮沈の関連性について論じた。そして、結論として、管志道は自らの保身を重視して士大夫としての言責を果しえなかったという自己の政治人生を正当化するため、士大夫の職責を限定する独特の思想を持つに至ったことを述べた。さらに、管志道と東林党との間に発生した哲学論争の背景には、それぞれの政治経験の違いが存在するという見通しを提示した。

社会科学院での報告の様子

中国蔵学研究中心出張報告

西蔵文献研究　研究代表者・教授　三宅 伸一郎

2019年3月25日㈪から同27日㈬の間、学術交流協定に基づく共同研究の打ち合わせのため、上野牧生研究員とともに中国・北京にある中国蔵学研究中心に出張した。

25日㈪NH 979便にて関空発、北京には定刻より少し早く到着。空港では、昨年来学した中国蔵学中心・中国蔵学網蔵文編緝のテンジン・ノルブ氏の出迎えを受ける。ホテルにチェックインし、しばし休息の後、中国蔵学中心を訪問し、15時30分より学術交流協定に基づく共同研究の打ち合わせを行った。中国蔵学中心側の出席者は以下の通り。

- ワンデカル（社会経済研究所研究員）
- ダワ・ツェリン（宗教研究所研究員）
- デフチ・ジョマ（宗教研究所研究員）
- 李学竹（宗教研究所研究員）
- ルモツォ（宗教研究所研究員）
- リンチェン・ジョマ（博物館研究員）
- ソナム・ドルジェ（図書資料館館員）
- 張思路（科研処）

会合では本学の出身者でもある李学竹氏の通訳で、まず、中国蔵学中心側の出席者がそれぞれ、現在取り組んでいる研究内容について説明した。これを受けて当方からは、共同研究にはできるだけ多くの研究者に加わって欲しいので、あまり小さなテーマにせず、何らかの大きなキーワードを設定し、それに基づいた研究するのが良いのではないかとの意見を述べた。また、双方の有している研究資料、例えば、中国蔵学中心が収集したチベット語文献のデータと本学所蔵のチベット語文献を総合的に利用・研究することにより、よりよい研究成果ができるのではないかとも述べた。

また、席上、本学所蔵の北京版チベット大蔵経について話題にした際、本学所蔵北京版チベット大蔵経テンギュルにはツォンカパ全集が存在することを述べたところ、その場にいた研究者全てが、ツォンカパ全集に北京版が存在することを知らなかったようで、大変驚きつつ、そのデジタル化を期待する旨を述べていた。

なお、今回の会合にはダムドゥル所長が所用のため不在であったため、今後の共同研究テーマの決定には至らなかった。ただし、今回の会合の内容は、張思路氏よりダムドゥル所長に報告されるとのことで、共同研究テーマやその協議書の作成、嘱託研究員の委嘱は、今後改めて先方と協議する必要がある。

会合の後、ソナム・ドルジェ氏の案内で図書館を見学した。昨年度寄贈された本研究班嘱託研究員で本学名誉教授であるツルティム・ケサン先生の蔵書は、すでに整理済みであったが、収蔵する専用の部屋は未完成であった。その夜の夕食は、李学竹氏、張思路氏、ソナム・ドルジェ氏と共に蔵学研究中心内の食堂にて会食した。

翌26日午前は、民族出版社にて、本学への留学経験のある同出版社勤務のサンジェフチ氏の案内でチベット語資料を購求した。午後、蔵学研究中心内の書店にてチベット語資料を購求した後、李学竹氏を訪ね、今後の共同研究に向けた事務的な手続き方法について意見を聞いた。夜は蔵学中心・宗教研究所のダワ・ツェリン氏、デフチ・ジョマ氏・ルモツォ氏、博物館のリンチェン・ジョマ氏と市内のチベット料理レストランで会食。デフチ・ジョマ氏からは、氏が取り組む吐蕃時期仏教に関する最新の知見を、また、リンチェン・ジョマ氏より青海博物館所蔵のチベット語文献についての情報を聞いた。

27日午前、蔵学中心・図書館にソナム・ドルジェ氏を訪問し、チベット語文献の目録化について意見交換を行った。11時30分にホテルをチェックアウトし空港に向かい、NH 980便にて予定通り、帰国した。

先述の通り、今回は、ダムドゥル所長ら幹部と会合することができなかったため、共同研究の内容決定に

蔵学中心の図書館にて

至ることはできなかったが、蔵学研究中心の最新の研究状況を理解することができ、今後の共同研究テーマをおおむね想定することができたことは、大きな収穫であった。

なお、ツルティム・ケサン先生の蔵書を収蔵する部屋はその後完成し、2019 年５月 25 日㈯、開室式が行われたとのことである。

ベトナムにおける共同研究調査報告

ベトナム仏教研究　研究員・教授　箕浦 暁雄

ベトナム仏教研究班の宮嶋純子嘱託研究員とグェン・トゥン・ザーン（Nguyễn Tường Giang）研究補助員と共に、研究協議および調査を目的として 2019 年２月 26 日㈫から３月５日㈫の間、ベトナムのフエとハノイを訪問した。26 日午後１時、定刻通りダナン空港に着いた我々は車でフエを目指した。遠回りにはなるが、ハイヴァン峠を越える道をゆくことにした。ベトナムのほぼ中央にあって南北に分かつハイヴァン峠を境に天候が変わると言われる。ベトナム戦争当時の砲台跡が残り観光客で賑わうその峠の頂上付近を見るにつけ、時に文化的往来を妨げ、時に軍隊の越境を拒む、地理学上重要な地であるとの見解には頷くほかない。フエに着いた我々を駒澤大学に留学中で一時帰国していた尼僧ヒェン・ニェン（Hiền Nhiên）さんが待ち構えてくれていた。フエの状況について情報交換し、明日からの調査研究に備えることにした。

27 日㈬の朝、フエに現存する仏教文献について情報収集する目的で報国寺を訪れた。報国寺は 1674 年に建立され、当該寺院第一世の住職は中国出身の覚峰という人物である。1968 年に戦争で木造の建物や仏像はほぼ焼失したが、書物は難を逃れたとのことである。しかし、それらの文献の厳密な調査は行われず今日に至っている。それとも調査に値するものはないのか？　書棚に収められた経典を数冊手にとることができたのみで、今回も新たなことはわからなかった。

午後、了観センターを訪れた。研究者たちと共に、フエに現存する版木や刊本についての情報交換を行った。学術誌 *Liễu Quán* にて公表されていること以上に新たな情報を得ることはできなかったが、公的機関や民間所有の版木について議論を行ったのち、何人かの研究者と共にフエ市内の民家に残る版木と刊本を実際に閲覧しに出向いた。今後、了観センターが撮影した画像データの閲覧がかなえば、それら版木の資料的価値が容易に知れるであろう。学界で共有できる日が来ることを願う。翌 28 日㈭には、宗教研究院分室にてチャン・ディン・ハーン（Trần Đình Hằng）氏と、ベトナムの研究動向について再び意見交換し、今後も継続して情報交換することを約束して別れた。

報国寺が保管する仏典の調査

さて、３月１日㈮にフエからハノイに移動した我々は、翌２日㈯にハイズオン省の「柳幢」（Liễu Tràng）という小村を訪れ、木版印刷の刻工に関する調査を行った。先に触れたフエやベトナム北部地域には多くの仏典の版木が残されている。古いものは 18 世紀中頃に造られたものもある。何が現存するのか、我々はすでに一定程度把握しているものの、それらは必ずしも学界で広く共有されてきたわけではない。宮嶋が報告している通り、なかにはベトナムにしか現存しない漢文文献が存在する（宮嶋純子「ベトナム・バクザン省ボーダー（補陀）寺所蔵典籍に関する基礎的検討」仏教史学会例会報告資料、2018 年９月　於大谷大学　参照）。しかも各寺院に残る版木の全体像がまだ十分明確になっていない。ベトナムにおける仏典刊行がどのように行われてきたのか、その実態について不明瞭なことが多い。かつて川本邦衛は、ハイズオン省の「柳幢」という社名（村名）で知られる小村を調査している。（川本邦衛『傳奇漫録刊本攷』慶應義塾大学言語文化研究所　1998 年）。多くの木版がこの小村の職人たちの手で造られている。午前９時ハノイを出発した我々は車でハイズオン省の柳幢という名の村を目指した。ちょうど米朝首脳会談開催のためにトランプ大統領とキムジョンウン委員長がハノイ滞在中で、各

所で交通規制が実施されていた。その影響で市内を出るだけでもずいぶん時間を要した。午後１時すぎに圭柳村（thôn Khuê Liễu）のドン・カオ寺（Tổ đình Đống Cao）に辿り着いた。ここは40名ほどの僧侶がいて、中級の仏学院も併設されている。仏学院の生徒は55人と聞く。寺院を出た我々は地元の女性に村の道案内をお願いし、ようやく明国に渡り刻工の技術を習得してこの村に戻ったルォン・ヌー・ホック（Lương Như Hộc 梁如鵠　1420-1501年）を祀った小さな廟を見つけることができた。村の人から話を聞いたのち、さらに村の中を行き、川本邦衛の報告を手がかりに、柳幢の伝承を知る人たちから聞きとりを行い、刻工の末裔にあたるご家族の自宅でわずかに残る彫刻の作品を確認するなどした。ベトナムにおける仏典刊行の歴史を描き出すためには、いまだ見えていないことが多くあろう。とはいえ、これまで明らかになったことを整理して残しておく必要性を強く感じた。

３日㈰に、ファン・ティ・トゥ・ヤーン研究員（Phạm Thị Thu Giang ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授・本研究班嘱託研究員）と面会し、４日㈪にはハノイの宗教研究院を訪問し、仏教概説について研究協議を行った。ファン・ティ・トゥ・ヤーン研究員とは、日本仏教概説をベトナム語訳するうえでの問題点について議論した。ハノイの出版社についての提案も受け、今後詰めの協議を行うことにした。一方、ベトナム仏教概説の執筆者トゥアン元院長が病気で亡くなられたために、ベトナム仏教概説出版の方針についてあらためて協議した。

ルォン・ヌー・ホックを祀る廟

今回は仏教概説出版についての研究協議と木版に関する調査を主目的として、さらには情報収集・文献収集のために寺院や併設される仏学院等を訪問した。なかでもフエにおいてティク・ナット・ハン（Thích Nhất Hạnh）師がフランスから帰国して居を構える慈孝寺に立ち寄り、師の姿を一目見ることができたことは実に印象深いことであった。

タイ国立図書館ほか所蔵の貝葉写本に関わる調査、並びに稀覯文献読解の共同研究報告

デジタル・アーカイブ資料室　嘱託研究員　清水 洋平

デジタル・アーカイブ資料室では、タイ王国より将来されたパーリ語貝葉写本（「大谷貝葉」）の中で、今までに稀覯文献と判明しているものを中心にデジタル画像データ化の作業を進めてきた。それと同時に、タイ国で現地調査も実施しながら、「大谷貝葉」における稀覯文献の抽出作業をおこなってきた。現在、同作業の進展により、新たな稀覯文献の存在も明らかになり、国内外から注目を集めている。

それを受けて、今回の現地調査では、「大谷貝葉」の中の文字の判読が難しい稀覯文献について、現地の専門家の協力を得ながら読解作業を進める。また、タイ国立図書館において、同図書館が所蔵する貝葉写本のうち、「大谷貝葉」の中の稀覯文献と関連する文献の所蔵状況を確認する。なお、「大谷貝葉」の稀覯文献抽出作業の一環として、以前より共同研究調査をおこなっている第１級王室寺院 Wat Phra Chettuphon（通称 Wat Pho）の Phra Rajapariyattimuni（Prof. Ven. Thiab Malai）長老（マハーチュラーロンコーン大学仏教学部長）などとも、稀覯文献抽出作業の今後の打ち合わせが必須である。今回は、これら３点の調査、共同研究・打ち合わせを実施することを目的としている。

2019年３月７日㈭から３月15日㈮の日程（３月14日㈭は、当該研究調査以外の業務を実施）で、タイ国首都府バンコクに所在するタイ国立図書館や王室寺院、並びにその他の研究機関において調査を実施した。本調査は、図書館・寺院側との交渉や通訳、及び研究協力者として、タイ国に流布する仏典写本研究の専門家である、Dr. Chaowarithreonglith Bunchird 氏（Head of Tipiṭaka Research Center, Dhammachai

Tipiṭaka Project, Thailand）、Dr. Srisetthaworakul Suchada 氏（Head of Center for the Study of Ancient Manuscripts, Dhammachai Tipiṭaka Project, Thailand）の助力を得ながら、舟橋智哉氏（同デジタル・アーカイブ資料室嘱託研究員）と共に実施した。

３月８日㈮は、タイ国立図書館を訪問した。数多くある Ānisaṃsa 文献群の中から、「大谷貝葉」の中の稀覯文献“ānisaṃsa-sabbha”（ānisoṅg nā sop）に関連する写本文献の所蔵状況の確認をおこなった。研究推進に必要と思われるもの３種について複写依頼を進める準備を整えた。

その後、タマユット派の第１級王室寺院 Wat Ratchabophit を訪問した。「大谷貝葉」の来歴についてはタイ国王ラーマ５世（在位：1868-1910）が大きな関わりを持つが、そのラーマ５世が 1869 年に建立したのが同寺院である。現在のタイ国のサンガラージャ（法王：僧団の長）は同寺院の住職であることでも知られている。同寺院の学僧であり、サンガラージャの侍従である Phra Khru Samphipatthanametthāchan 長老に面会し、写本の所蔵状況、並びに「大谷貝葉」の中の稀覯文献について意見交換をおこなった。

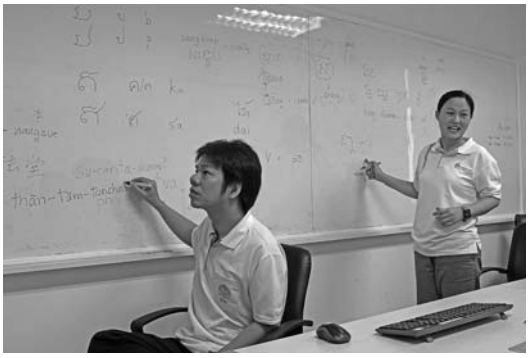
その他、ラーマ５世が父のために建立したバンコク：トンブリー区にある第１級王室寺院 Wat Ratcha Orasam を訪問し、写本の所蔵状況などを確認した。

３月９日㈯から３月 12 日㈫までは、アユッタヤー県に所在する Dhammachai Institute の Tipitaka Project を訪問した。上述の C. Bunchird、S. Suchada の両氏から、「大谷貝葉」の中の稀覯文献におけるコーム（Khom）文字で記されたタイ語の文章について読解の手ほどきを受け、読解作業を進めた。この作業により、「大谷貝葉」の中の稀覯文献“ṭīkā-saṅgaha”について、筆写者名と筆写年代が判明した。

３月 13 日㈬の午前は、上記 Tipitaka Project が主催する写本研究のセミナーに参加した。午後は、Wat Pho 寺院において、上記の Phra Rajapariyattimuni（Ven. Dr. Thiab Malai）長老と「大谷貝葉」の中の稀覯文献について、研究の方向性や今後の調査の打ち合わせをおこなった。

今回の調査では、C. Bunchird、S. Suchada の両氏の全面的な協力のもと、今まで手付かずの難解なコーム文字で記されたタイ語の文章の読解作業に着手できたことは、大変有意義であった。僅かな時間にも関わらず、「大谷貝葉」の中の稀覯文献の一つについて、筆写者名と筆写年代を明らかにすることができたのである。

このように Dhammachai Institute の C. Bunchird、S. Suchada の両氏や Wat Pho 寺院などとの協力関係が築かれている間に出来る限り早く再訪し、今回の調査に続けて「大谷貝葉」に関する稀覯文献の調査・写真撮影、並びに読解作業を推進して行きたい。



C. Bunchird（左）、S. Suchada（右）の両氏から、難解文についての読解の手ほどきを受ける。

Tipitaka Project 主催の写本研究のセミナー

ユネスコ「世界の記憶」ヨーロッパ最古の公共図書館の成立：メディチ家図書館との関連

2018 年度一般研究（山本班）研究代表者・教授　山本 貴子

ヨーロッパ最古の公共図書館の一つということから、2005 年に、図書館として世界で最初にユネスコ「世界の記憶」に登録されたのが、マラテスティアーナ図書館（Biblioteca Malatestiana）である。この図書館は、当時の領主マラテスタ・ノヴェッロ（Malatesta Novello：1418-1465 年）によって、1452 年に設立されたものである。ただ、「世界の記憶」に登録されてはいるが、調査・研究は世界的にもほとんど行われてない。

そこで、筆者は平成 28 年度から調査を開始した。今年度の研究では、同時代にイタリアで設立されたといわれる図書館のうち、ノヴェッロと関係のあったメディチ家の図書館を取り上げた。

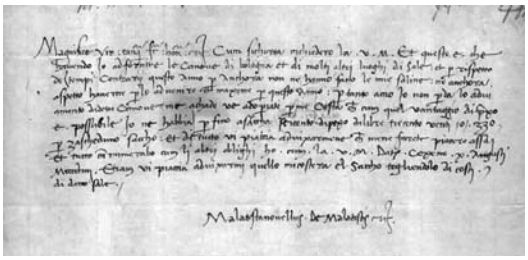
メディチ家は、ルネサンス期のフィレンツェにおいて金融業・政治家として台頭した一族である。その中でも、コジモ（1389-1464 年）とその孫ロレンツォ（1449-1492 年）は最も権勢を誇り、イタリア各国への影響力も強かったと言われる。その二人が建てた図書館が、サン・マルコ図書館（1444 年）とラウレンツィアーナ図書館（1571 年）である。

ノヴェッロは、自分の図書館の蔵書を充実させるため、メディチ家と蔵書を貸し借りし、写本を作成していたといわれている。そこで今回は、その実態を調査した。

調査期間は、2019 年 2 月 11 日㈪－ 2 月 20 日㈬であった。まず、コジモが設立したサン・マルコ修道院内の図書館を訪問したが、建物として存在しているだけで、資料も図書館設備も、さらには、研究組織も存在しなかった。一方の、ロレンツォが設立したサン・ロレンツォ聖堂内のラウレンツィアーナ図書館では、建物は当時のままに残されていた。この図書館の研究者と話をしたところ、サン・マルコ図書館およびラウレンツィアーナ図書館両方の資料は、この建物内に保存されているとのことだった。ただ、ここでもノヴェッロとの関連がわからなかった。

そこで、国立中央図書館（フィレンツェ）とフィレンツェ文書館で資料を探索した。すると、フィレンツェ文書館で、マラテスタ・ノヴェッロがコジモやロレンツォ、ジョヴァンニなどメディチ家に宛てて書いた手紙を 11 通見つけることができた。今までの研究では、ノヴェッロとコジモの間で、書簡をやり取りしていたことがわかっている。これらが解読できれば、その詳細がわかる可能性が高く、また、仮に、チェゼーナに、これらの手紙に対して書かれた返事が残っているとすると、さらに深い関係がわかることになる。

今回の調査によって、ウルビーノでは新たな図書館が見つかり、また、フィレンツェではノヴェッロとの関連を示すものが見つかった。現在、この手紙の解読を進めており、今後さらに調査を進める予定である。



マラテスタ・ノヴェッロから 1454 年に送られた手紙

ラウレンツィアーナ図書館内部

国際シンポジウム参加報告（韓国外国語大学）

元東京分室 PD 研究員　松澤 裕樹

2019 年１月９日㈬から 13 日㈰にかけて、韓国外国語大学龍仁キャンパスで開催された国際シンポジウム「2019 International Conference on Humanistic Studies in HUFS: East and West as Centers in a Centerless World」に参加した。当シンポジウムでは、研究領域の異なるアジア・ヨーロッパ・アメリカの研究者が一堂に会し、欧米中心の一元的世界へと向かう現代のグローバル化に対するアンチテーゼとして掲げられた「中心なき世界における中心としての東西」というテーゼに関して、三つの部会に分かれて発表と質疑応答がなされた。第一部会は、地域研究に関するセクションであり、南アフリカ・ハンガリー・インドネシア・韓国・日本という多様な地域における研究発表がなされた。第二部会は、言語と文学に関するセクションであり、日本文学・日本文化・中国語・中国北東地方の方言・アメリカ文学に関する研究発表がなされた。第三部会は、歴史と哲学に関するセクションであり、東アジア・韓国・トルコ・ドイツの歴史に関する発表に加え、アリストテレス・カント・ハイデガー・儒教・韓国仏教・韓国哲学・日本哲学・ヨーロッパ中心主義・文化心理学といった幅広い分野からの発表がなされた。私は日本からの唯一の参加者・発表者として「Dynamic Structure of Human Existence in Watsuji Tetsuro's Ethics」という題目で研究発表を行った。和辻の人間存在論は、一極集中的なグローバル化に対するアンチテーゼとして現代社会において大きな意義を持つ理論であり、様々な文化的背景を持つ研究者と和辻の人間存在論の現代的意義に関して議論できたことは非常に良い経験となった。

去年も同様に韓国外国語大学で開催された国際シンポジウムに参加して感じたことだが、アジア人研究者と議論する中で、我々アジア人が西洋の思想を学ぶ意味は一体何なのかという根本的な問題について改めて考えさせられた。今後、西洋の論理や概念を修得したアジア人研究者が協力して東洋思想を現代的に発展させ、今度は東洋から西洋へと思想を伝達していくことが大きな課題として我々に課せられていると感じた。

国内研究調査報告

「新しい時代における寺院のあり方研究」（2018 年度下半期）に関する調査報告

新しい時代における寺院のあり方研究　研究員・教授　山下 憲昭
同　特別招聘者・任期制助教　野村 実
同　研究補助員（RA）・博士後期課程社会学専攻第一学年　磯部 美紀

特定研究２年目となる 2018 年度は、『研究所報』No.73 にすでに報告したように、上半期において岐阜県揖斐川町春日地区の寺院、門徒、地域住民への聞き取り調査をおこなった。ひきつづき同年度の下半期には、大きく分けると、二種の調査を実施することができた。一つ目は揖斐川町春日地区を中心とした住民生活の状況や住民の地域活動への参加状況などの実情を聴取することを目的とした揖斐川町社会福祉協議会への聞き取り調査である。二つ目は、春日地区における墓制という点にしぼった現地調査である。これは春日地区の調査が進むにつれ、同地区の墓地および葬送に多様性が見出され、より詳細な墓制にたいする理解が必要であると判断し、2019 年３月に集中して実施されたものである。以下、上記二つの調査報告について、その概要を述べる。

【揖斐川町社会福祉協議会揖斐川支所における聞き取り調査】
調査日時：2018年11月19日(月)　11時30分～14時30分
聴取対象：揖斐川支所長（地域福祉係長）・森口氏
揖斐川支所職員・木下氏、春日支所職員・野村氏
調査者：山下憲昭、野村実

市町村社会福祉協議会は、社会福祉法人として民間の立場から地域の福祉を推進する専門機関である。地域組織化にかかる地域福祉コーディネーターや介護保険事業にたずさわる職員などが配置されている。2018年11月19日、揖斐川町社協揖斐川支所において、揖斐川町全般および春日地区の住民生活の状況や住民の地域活動への参加状況などの実情を聴取した。とくに、人口減少と高齢化・過疎化にともなう生活課題に焦点をあてた聞き取りになった。

1. 町社協データからみる人口動態・高齢化の実情

2005年に揖斐川町が揖斐郡谷汲村・久瀬村・春日村・坂内村・藤橋村と合併し、新しい揖斐川町が発足した。合併当時の人口は26,192人であったが、その後、10年余を経て21,354人にまで減少した（2018年10月）。現在の高齢化率は、全町平均で37.5%であるが、春日地区は坂内地区（61.7%）についで高い55.5%となっている。

転出にともなう人口減少がすすんでおり、とくに近接の池田町への転出が多い。春日地区から比較的近く、大垣や名古屋方面への通勤と親の世話や田畑の耕作とが両立することを理由にしているものと考えられる。

2. 特徴的な生活課題

2.1　買い物アンケートから

2017年12月から翌年1月にかけて、高齢者を対象とした買い物にかんするアンケートが実施された。揖斐川町全域の高齢者の40%が「買い物に不便」を感じている。その理由としては、「近くに店がない」約50%、「重いものがもてない」約25%、「交通手段がない」約20%という内訳であった。ただ、現状では８割あまりの人びとが自分または家族で買い物ができていると答えている。１割程度の人びとは、生協や地元商店の宅配を利用している。

買い物にかんするアンケートの自由記述欄に、今日の過疎地の不安をあらわすものがみられた。「５年後10年後が心配」「一人は寂しい」「話し相手がいない」という暮らし全般にかかわる回答や「運転できなくなったら困る」「バスの本数が少ない」「慌てて買い物しないといけない」といった、いわば「交通弱者」「買い物弱者」と言われる現実が迫ってきていることがわかる。

2.2　高齢者サロン活動への参加傾向

各地の社会福祉協議会が取り組んできた高齢者の生きがいづくり・居場所づくりをめざしたサロン活動は、揖斐川町でも熱心に取り組まれている。町全体で83ヶ所開催され、春日地区では毎月１回開催されている。社協によると、奥まった地域ほどサロン活動の重要性が高まるが、活動を支える担い手が不足してきている。

社協職員によれば、高齢者にとって「自分に必要かどうか」がこれらのイベントへの参加の判断基準であるという。自分にメリットがあるか否かを判断している。そのことが長生きの要因であるともいえる。

ただ、春日地区でのサロンでは、代表者が高齢になったり体調不良になって、活動が消滅する地域もあるという。一方、高齢化率がきわめて高い春日地区中山（高齢化率85.0%）は住民全員が参加している。

3. 春日地区の「強み」

家々の軒が接する六合地区や中央地区では、防火という観点から防災意識が高く、「火番」が伝統的に取り組まれている。また、地域の祭への寄付や社協が取り組む募金についても協力的である。サロンや要支援手前の高齢者を対象にした「青春塾」への参加者のなかで、「お寺は楽しい」、講話やイベントごとを楽しみにしている人びともあるという。高齢化と人口減少のなかにあって、なお、春日地区では人びとの繋がりの強さが、今後を展望するときの鍵になるものと考えられる。

揖斐川町社会福祉協議会における聞き取り

【揖斐川町春日地区（旧春日村）における墓制調査】
調査日時：2019年３月23日(土)～３月24日(日)/
28日(木)～29日(金)
調査内容：岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区における墓制調査
調査者：本林靖久・磯部美紀

本調査の目的は、旧春日村における墓のあり方を明らかにすることである。旧春日村はこれまで「墓がない」地域と言われてきたが、当地域を実際に歩くと複数の墓を目にすることになる。旧春日村における墓制は、いかに把握できるのか。

この検討にあたり、予備調査（実施日：2019年３月23、24日）の後、３ケ寺の住職に対する聞き取り調査を行った（実施日：2019年３月28、29日）。予備調査では、旧春日村の集落ごとに埋葬方法と墓の有無を検討した。聞き取り調査では主に、①寺院が立地する地域の埋葬方法、②墓の有無、③本山納骨・須弥壇納骨の様子、④納骨堂・惣墓・共同墓について確認した。

調査結果を総括すると、当地域は全体的に火葬が主であるが、墓のあり方（遺骨の取り扱い方）には違いがみられたと言える。その違いを寺院ごとに整理すると、次のように記述できる。まずＡ寺の位置する集落には、同族墓（一族ごとの墓）が４基と個人墓が５～６基存在する。同族墓の護持は墓の世話係によって担われ、毎日～週１週の頻度で掃除や花替えが行われている。本山への納骨は２年に１回バスをチャーターして行われ、毎回20名ほどの参加がある。納骨堂の建立については、以前に検討されたが賛否両論あり、現時点で実現に至っていない。次にＢ寺の位置する集落では、５～６基の墓を確認することができる。本山への納骨については、四十九日の後、須弥壇納骨あるいは大谷祖廟へ納骨する門徒が多く見受けられた。しかし近年、京都へ移動する困難さが問題視され、それを受けて惣墓が建立された。惣墓の維持・管理は現在、住職をはじめとする、いわゆる「寺族」によって担われ、住民はあまり関わっていない。そしてＣ寺の位置する集落には、数十基の墓が存在する。住職によれば戦前には墓がなく、戦後になってつくられるようになったという。その背景として、戦没者の弔いが挙げられている。納骨については、もともと当集落に須弥壇納骨をする習慣はなく、現在でも希望する門徒のみが各自で本山へ納骨に行っている。多くの場合遺骨は、中陰の後に、家の軒先または共同墓地にある墓に納骨される。当集落の墓の形状は、五輪塔から「自然石を少し加工したもの」まで様々である。近年では、「自然石がゴロンゴロンとしているだけではなんだか寂しいから」と新たに墓をたてる門徒がいる一方で、墓じまいをする門徒も見受けられる。また、無縁仏が出るということから本堂裏に建立した共同墓は、ほとんど利用されていない。

ここまで、旧春日村の墓のあり方について、違いに注目して記述してきた。最後に、聞き取り調査を行った３寺院に共通していた特徴を３点指摘する。第１に、各寺院とも境内に墓地を持たないということである。境内に墓が全くないわけではないが、あるとしても１、２基であり、墓地と呼べるほどのものは存在していない。墓のほとんどは、寺院境内とは別の場所に位置している。よって、門徒が墓参りのついでに寺院を訪れるという姿は想定しにくい。第２に、墓への関与（維持・管理は除く）は、基本的に門徒からの要望があった場合にのみ行うということである。つまり、門徒から「墓経」の依頼があってはじめて、僧侶が墓に関わることになる。第３に、墓のあり方の現状に各々の寺院が困難性を抱えているということである。それは具体的には、納骨堂建立をめぐっての議論、惣墓の管理主体についての問題、墓じまいといった形で立ち現れている。これらの困難性の背後には、従来の墓制と現代の生活実態とのギャップを見て取ることができる。これは当地域だけではなく、全国各地で問題視されている事柄でもあろう。以上の３点は、今後、墓を介した寺院と門徒とのつながりを検討していく上で、念頭に置くべき重要な特徴であると言えるであろう。

春日地区における墓制調査の様子

沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査

元東京分室 PD 研究員　藤原 智

2019 年２月３日㈰から２月 13 日㈬にわたり、東京分室の指定研究の一環として池上哲司（東京分室長）・松澤裕樹（PD 研究員）・藤原智（PD 研究員）の三名で実地調査に赴いた（肩書はいずれも当時）。日本の歴史の中で、宗教というものがどのような形で存在し、また語り継がれていくことになったのかを様々な宗教的な場を実地に赴いて調査することにより、宗教の持つ意義を多角的に捉えることが目的であった。まず沖縄の伝統的生活が今なお色濃く残る竹富島・石垣島に点在する御嶽を中心にたずね（２月３日～７日）、聖地および聖なるものを検証し、次いで五島列島では苛烈な弾圧のもとひたすら守り続けられてきた潜伏キリシタンたちの信仰について調査した（２月８日～13 日）。以下、当調査の一部を簡単に報告する。

２月３日、夕方の五時前になってようやく竹富島に到着した。周囲約九キロメートルという小さな島だが、大まかな島の様子を知るためにも、わずかな時間であるが早速いくつかの御嶽を中心に調査に出た。まず島の中心部の開けた場所に位置し、「島守りの神西塘様」と記される十六世紀に八重山全域を統治した西塘を祀った西塘御嶽、そして八重山の島々を造った神を祀る清明御嶽を調査。続けて六山と呼ばれる島の始まりを伝える重要な御嶽の一つである中筋御嶽と幸本御嶽に向かった。前の西塘御嶽と清明御嶽は開けた場所に立てられていたが、この両御嶽は手前入り口の鳥居に柵が敷かれ、その様子は全く窺い知ることはできない（なお、多くの御嶽が同様である）。他に人頭税廃止の祈念碑やいくつかの史跡を回り、調査を終えた。

竹富島、西塘御嶽

２月４日㈪、日の出に合わせて島の東岸に行き、海岸沿いの茂みにひっそり佇む東美佐志御嶽を調査。ちょうどそこに島の住民と思われる女性が現れ、日の出を眺めた後、御嶽の簡単な掃除をし、拝んで帰っていった。その女性の語るには、この御嶽は竜宮の神様を祀っているとのことであった。島の中心部に戻り、島最大の祭りである種子取祭が行われる世持御嶽、次いですぐ隣にある六山の一つ玻座間御嶽、真知御嶽を調査。その後、島の北端にある美崎御嶽、島の東側に集まる六山の久間原御嶽・波利若御嶽・花城御嶽、また島の中央部の国仲御嶽・東ファイナーシー御嶽を調査した。島には民俗資料を集めた蒐集館があり、これは浄土真宗本願寺派の喜宝院の併設となっている。ここを訪ね、様々な歴史資料を閲覧するとともに、館長からいろいろなお話を伺った。特に死者を乗せる駕籠（現在は使われていないということであったが）に関するユーモラスなエピソードとともに、葬送の在り方なども聞かせていただいた。島の西側では、ニライカナイから神々がやってきた際に綱を引っかけるというニーラン神石や、西美崎御嶽などを調査した。

２月５日㈫からは石垣島の調査に移った。初日は市街地から離れた北部を中心に調査した。半嵩御嶽に到着したとき、ちょうど旧正月の祭事を行った直後であった。そこにおられた祭事に関わるツカサの女性から、豊年祭などでの祈願についてや、ツカサが減っていって合祀されてきた状況などお聴きした。続けてムトゥムラ御嶽、高間御嶽、浜崎御嶽、赤イロ目宮島御嶽、山川御嶽、群星御嶽、崎枝御嶽と調査に巡った。

２月６日㈬も終日、石垣島の御嶽の調査に回った。初めに郊外を、続けて市街地を巡った。詳細は省くが於茂登御主神、名蔵御嶽、水瀬御嶽、地城御嶽、基斗御嶽、真謝御嶽、トイの御嶽、オーセ、嘉手刈御嶽、飾場御嶽、クシヌオン、波照間御嶽、多原御嶽、旧盛山村跡、伊野田御願所、星野御願所、仲嵩御嶽、宮良村オーセ、東嘉和良嶽、小浜御嶽、外本御嶽、宇根御嶽、山崎御嶽、潤水御嶽、大城御嶽、舟着御嶽、黒石御嶽、大石御嶽、火の神御嶽、崎原御嶽、東崎浜願所、多田御嶽、宇部御嶽、舟屋御嶽、トウメスカ御嶽、藍盛・迎里御嶽、大阿母御嶽、古見ぬ主御嶽と調査に回った。

２月７日㈭は沖縄での調査最終日であり、午前中の

間に以下の市街地の御嶽などの調査に向かった。桃林寺権現堂、宮鳥御嶽、大石垣御嶽、キツィパカ御嶽、旧宮良殿内、糸盛御嶽、天川御嶽、舟着御嶽、真泊嶽、船浦御嶽、美崎御嶽、長田御嶽、ビッチンヤマ（美鎮山）、竜宮の御嶽。以上の調査を終えた後、五島列島の福江島へと向かった。

竹富島・石垣島ともに御嶽は大通りに面した鳥居の立派な大きなものから、ひっそりと佇んでいるもの、もう打ち捨てられてしまったものなど様々である。個人的に印象に残ったある御嶽について記しておきたい。そこは鳥居も拝殿もなにもなく、茂みをかき分けたその奥に少しの開けがあるだけの場所。その開けた地面に聖域を示す境界となる石の列が敷かれ、その聖域内には丸い石がポンと置かれている。それは一種の衝撃であった。かつて岡本太郎は『沖縄文化論－忘れられた日本』で「「何もないこと」の眩暈」と述べたが、確かにそのようにしか言いようのない経験であった。

２月８日㈮以降は、五島列島における潜伏キリシタンに関する施設等の調査を行った。特に現在カトリック教会が五島列島に51箇所存在するが、五島列島でもさらに離島の嵯峨島・小値賀島・野崎島を除く48箇所を訪ねた。

２月８日は福江島の教会を調査に巡った。初めに市街地にある福江教会から、島の南西にある井持浦教会、玉之浦教会へ巡り、次いで貝津教会、淵の元キリシタン墓地、三井楽教会、嶽家牢屋敷跡、打折教会、水之浦教会堂、楠原牢屋跡、楠原教会堂、繁敷（山の田）教会と調査に回った。特に、三井楽教会墓地での姫島信仰の碑や嶽家牢屋敷跡、水之浦牢屋跡、楠原牢屋跡などで、潜伏キリシタン迫害の様子を窺った。

２月９日㈯は、まず福江島の半泊教会、宮原教会、堂崎教会、浦頭教会と巡り、また五島歴史資料館に向かった。特に堂崎教会は、非常に豊富な資料館になっており、多くの貴重な物品などを見ることができた。その後、久賀島に渡り世界文化遺産の構成資産である旧五輪教会堂から牢屋の窄殉教記念聖堂、浜脇教会と調査に回った。浜脇教会では『「牢屋の窄」殉教150周年　信仰の碑』（2018年10月）という冊子が頒布されており、16世紀以来の久賀島のキリシタンの詳細な歴史を知ることになった。なおこの日の夜は福江教会のミサに参加した。

２月10日㈰は、まず奈留島に渡り、世界文化遺産の構成資産であり、潜伏の終わりを告げる建築として知られる江上天主堂の調査に向かう。続けて南越（水ノ浦）教会堂（ただし高台にあり、地元の人に聞くと老人の足では登れないため閉鎖）、奈留（相ノ浦）教会堂に向かい、その後若松島に渡る。若松島では、有福教会、土井ノ浦教会堂、大平教会と調査に廻った。特に土井ノ浦教会堂にはカリスト記念館が併設され、古いキリシタン資料と遺物など大変興味深いものが陳列されていた。

２月11日㈪は、橋を渡り中通島の南部を中心として教会群に向かった。中ノ浦教会、若松大浦教会、桐教会、高井旅教会、福見教会、浜串教会、船隠教会、佐野原教会、真手ノ浦教会、焼崎教会、猪ノ浦教会堂、跡次教会、大曾教会、冷水教会、丸尾教会、鯛ノ浦教会と廻る。最後の鯛ノ浦教会は、旧教会堂が資料館とされており、ここでも多くの陳列物に接することができた。

２月12日㈫は、まず世界文化遺産の構成資産である頭ヶ島教会堂に向かった。その後、中通島北部の青砂ヶ浦天主堂、曽根教会、大水教会、小瀬良教会、江袋教会、赤波江教会、仲知教会、米山教会、青方教会と調査に回った。途中、多くの教会堂の設計をした鉄川与助の菩提寺である本願寺派元海寺にも足を運んだ。鉄川自身は生涯仏教徒であったという。

以上は簡単な報告であるが、今回の調査を通してそれぞれの地域の歴史の中で宗教が受容され、また保持され、表象されていったのか、多くの知見を得ることのできた有意義な機会となった。

調査に訪れた頭ヶ島教会

公開講演会・公開研究会

第６回「宗教と人間」研究会　開催報告

元東京分室 PD 研究員　松澤 裕樹

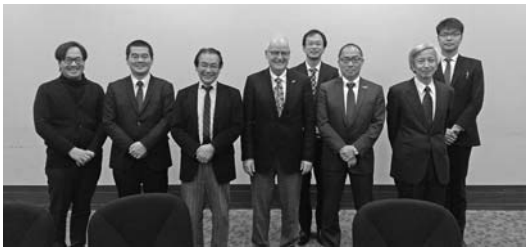
第６回「宗教と人間」研究会は、大谷大学真宗総合研究所東京分室と立教大学大学院キリスト教学研究科との共催シンポジウムとして、2018 年 12 月 16 日(日)に立教大学池袋キャンパスで開催された。今回の研究会では、「恩寵と他力――キリスト教と仏教の対話」をテーマとして掲げ、本テーマに関して深い知見を有する４名の先生方をお招きし、東西の宗教者が宗教的救済における神仏と人間との関係をいかに捉えたのかという問題に関して宗教間対話を交えながら理解を深めることを目指した。

はじめに、テュービンゲン大学カトリック神学部教授のヨハネス・ブラハテンドルフ氏による講演「Freiheit, Gnade und das natürliche Streben zum Guten bei Augustinus（アウグスティヌスにおける自由、恩寵、善への本性的志向について）」が行われ、アウグスティヌスの恩寵論における前期と後期の思想的差異性、そしてアウグスティヌスと親鸞の他力論との間にある共通点や相違点について語られた。続いて、上智大学神学部専任講師・イエズス会司祭の角田佑一氏による講演「マルティン・ルターと清沢満之における信仰と実践――恩寵と他力の体験――」が行われ、ルターにおける信仰義認の構造と清沢におけるエピクテトス理解と自由意志理解に関する詳細な解説の後、両者の信仰と実践に関する思想の共通点と相違点について考察が加えられた。休憩を挟んで、大谷大学学長・文学部教授の木越康氏による講演「『他力』という出来事――親鸞の廻向論――」が行われ、廻向という観点から親鸞の他力思想について論じられた後、カール・バルトによる親鸞理解を通じた両宗教の共通点と相違点について考察された。最後に、早稲田大学名誉教授の田島照久氏による講演「エックハルトにおける恩恵論――『私の花は実である』（シラ書 24：23）の解釈をめぐって――」が行われ、離脱論と本質的始原論に関する詳細な分析の後、上記の章句をめぐるエックハルトの思想と道元の「修証一等」における思惟枠組の共通性が語られた。

引き続いて行われたディスカッションでは、講師の先生方の間で講演内容に関して活発な議論が交わされ、「恩寵と他力」というテーマをめぐってキリスト教と仏教との宗教間対話を促進させることができた。木越氏は、ブラハテンドルフ氏によって紹介されたアウグスティヌスの二つの恩寵論に対応する思想的区別が親鸞にもあるということを『教行信証』信巻を例として挙げながら指摘した。また、田島氏は、アウグスティヌスにおける神化思想の可能性について質問を発し、それに対してブラハテンドルフ氏は、エックハルトとは異なるレベルで展開されるアウグスティヌスの神化思想について詳細な解説を加えた。

今回の「宗教と人間」研究会は、2016 年の真宗総合研究所東京分室開設以来、初めて他大学と共催した研究会であり、また初めて海外の研究者をお招きする等、非常に大々的に行われた。広報活動も多方面で行った結果、予想を大きく上回る多数の方々が来訪され、開設されて間もない真宗総合研究所東京分室の存在を東京の様々な研究者達に認知してもらう良い機会となった。

シンポジウムの様子



発表の先生方と共に

ヨーン・ボルプ氏による公開講演会

国際仏教研究（英米班）研究代表者・講師　Michael J. Conway

2018 年 11 月 14 日㈬の 16 時半から、デンマークのオーフス大学のヨーン・ボルプ准教授を招聘し、「Japanese Buddhism in Europe」（ヨーロッパにおける日本仏教）という題で講演をいただき、国際仏教研究の 2018 年度の第２回公開講演会とした。会場は、響流館３階の演習室１で本学の教員と大学院生を中心に 15 名ほどの聴者が集まった。

ボルプ先生は、オーフス大学宗教学科の主任を勤めている。専門は宗教学で、研究対象が主に日本の諸宗教および日本の宗教団体の海外における伝播である。デンマーク語と英語による著書と論文を多数、発表しており、近年の編著に関しては『*Eastspirit : Transnational Spirituality and Religious Circulation in East and West*（東洋精神：東洋と西洋における超国家宗教性と宗教的交流）』（Brill, 2017）を挙げることができる。

講演の中で、ボルプ先生は、ヨーロッパにおける仏教の歴史を追った上で、現在のヨーロッパで有力な日本仏教として、禅宗、創価学会、そして回向寺に展開されている日本文化センターと合わさって伝わっている仏教を取り上げた。氏によれば、幅広い層のヨーロッパ人は仏教に対して好感を持っている。特に、キリスト教離れが進んでいる若い人の中で、仏教やその他の東洋の宗教思想に目を向ける者は少なくないと言う。

そして、次にそのよいイメージのルーツについて尋ねて、仏教がヨーロッパで紹介されてきた歴史の概略を紹介した。ヨーロッパでは、仏教に対する関心がかなり古く、18 世紀に遡ることができる。そして、19 世紀の初頭から東洋の思想が多くのロマン主義思想家に注目され、高く評価されたという点に今の仏教に対する風潮の原点があると論じた。その後、インド学、東洋学の発展に伴い、仏教の諸聖典が研究の対象となり、ヨーロッパの研究者が大乗仏教を批判的に堕落したものとして捉えた一方、いわゆる南伝仏教の内容を高く評価し、キリスト教の問題を超え得る宗教的伝統の一つとして重要視したことを紹介した。そして、ヘンリー・スティール・オルコット大佐のアジア周遊について言及し、仏教の伝播における受容者側のオリエンタリズムの問題性を指摘した。

20 世紀に入ってからは、南伝仏教を偏によしとする傾向が薄れ、鈴木大拙やクリスマス・ハンプフリーズによる伝道活動が大きく影響を及ぼし、1960 年代から 1980 年代まで、ヨーロッパで最も注目された「禅」に対する関心の基礎を築いたと論じた。その約 30 年の間では、ヨーロッパ人によって禅を組む道場が多数設立され、一時期はたいへんな盛況を見せていたが、創設者から次世代への引き渡しがうまく行かず、現在は閉鎖の危機に瀕している禅堂は少なくないと述べた。1993 年にヨーロッパで開催された集会において、法燈の継承・戒律や清規の適用・得度のあり方・日本の既成教団との関係性等、様々な課題が話し合われたが、25 年後の今でもそれらに対する十分な解決を得られていないから、活発に動いていた禅宗もヨーロッパでは停滞し、他の宗教教団と同様に縮小の途を辿っていると論じた。

それに対して、研究の初期段階ではあるから、明確な数字が示せない状況であったが、創価学会の活動を紹介し、ヨーロッパで禅宗が抱えている課題を克服しているように見受けられると論じた。

最後にボルプ氏は、仏教伝道協会の助成を得て、ドイツに建てられた回向寺を取り上げ、今後、ヨーロッパで仏教を定着させていくために可能性のある取り組みとして評価した。回向寺は日本庭園を整備されており、定期的に日本文化に関する催しを通して、地域住民に座禅だけではなく、様々な形で仏教文化に親しんでいただく機会を設けているから、仏教に関心を持つより広い層の人に仏教の門に入る可能性を高めていると述べた。

以上の形で、ボルプ先生から、ヨーロッパにおける日本仏教の現状について報告を聞き、終了後には質疑応答の時間において活発な議論が展開された。

ボルプ先生の講演

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）嘱託研究員・准教授　井黒 忍

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、同研究所より４名の研究者を招聘し、2018年12月14日㈮に響流館４階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて公開研究会を実施した。学内外から計16名が参加し、活発な討論を行った。

研究会では４名の発表者による研究発表が行われた。１人目の発表者は楊宝玉氏（中国社会科学院歴史研究所文化史研究室、研究員）、発表テーマは「“江南の遠客跧り、翹思するも未だ還るを得ず”――晩唐期に西陲の敦煌に滞在した江南の文士」である。張球は晩唐五代時期に長期にわたって敦煌に滞在し、大量の作品を残した今日知られる唯一の江南の文人である。敦煌文書の中に残されたその作品は、敦煌の政治、軍事、文化、民俗や社会生活など多方面に及ぶ内容を持ち、唐代晩期の文学史や文化史のみならず、帰義軍の歴史を知るためにも有効な資料となる。また、そこには当時の重大な事件の具体的状況とその影響を物語る情報が含まれており、政治集団の間の複雑で微妙な関係を紐解くための糸口が秘められている。

２人目の発表者は烏雲高娃氏（中国社会科学院歴史研究所中外関係史研究室副主任、研究員）、発表テーマは「多言語テキストに見る元代の駅と訳」である。「訳」と「駅」は異なる系統の言葉であるが、この両者は古来、外交、文化交流、商業活動の各方面において相互に関連するものであった。古代において官が養成する訳官は、駅に配置されて翻訳に従事したのであり、彼らは言語を媒介し交流を助けるプラットホームの役割を果たした。元代には、諸言語に通じた訳官が会同館に配備され、中央の客館として中外の使節たちに飲食と宿泊場所を提供したほか、駅伝の中枢として、さらには使節たちの商業・文化交流の重要な場として機能した。

３人目の発表者は、陳時龍氏（中国社会科学院歴史研究所明史研究室副主任、研究員）、発表テーマは「聖諭六条と明清時代の基層教化」である。明清時代の社会秩序構築において、聖諭の宣講は重要な教化内容を構成した。明清時代の六諭に対する解釈は、大きく四つの段階を経る。第一は、名臣が賛を附する段階である。それぞれの高官が行った解釈は訓詁の意味を持つとともに、その六諭の内容を褒め称えるものであった。第二は、嘉靖年間に郷約と結合し始めた段階である。六諭は郷約の条項の形を取り、六諭を綱とし、それぞれの注釈が目として附された。第三は、六諭の解釈が郷約と密接に結びつき、さらには郷約を超越するという段階である。道理を説く六諭の解釈は、族規や家訓にも応用され、明代晩期には当時流行した勧善思想とも融合した。第四は、清代康熙・雍正期以降で、聖諭十六条と『聖諭広訓』が郷約の中心となったことで、六諭の解釈はその実用性を長期にわたり減退させたが、嘉慶年間に至ると地方官や儒者、宗教者などにより再び重視され、郷約を離れて善書へと向かう動きが現れてくる。

４人目の発表者は、孫靖国氏（中国社会科学院歴史研究所歴史地理研究室副主任、副研究員）、発表テーマは「清代初期地図史引論」である。後金および清の入関後間もないころの統治集団は、周辺と全国の情勢を急ぎ理解しないといけないという切迫した状況の下におかれていた。そこで、後金と清の統治集団は戦利品という形で地図を手に入れ、自身のやり方でそれらを読んだのである。入関の後、多数の漢人官吏が統治集団に加わったことで、明朝の地図製作部門である兵部職方司が地図製作の重要な機関となり、その作成の技術が定例となった。清朝の統治がだんだんと安定してくるにつれ、地図作成にも自身の特徴が現れ、さらに西洋の技術を導入し、西洋の宣教師に地図の作成を委ねたが、清代末期に至るまで中国の伝統的な地図が主流であり続けた。

研究会の様子

公開研究会開催報告

佐野愛子氏「『禅苑集英』研究をめぐって－徐道行の転生譚を中心に－」

ベトナム仏教研究　研究員・教授　箕浦 暁雄

『禅苑集英』（*Thiền Uyển Tập Anh*）の解読研究を進めてきた本研究班は、2018年12月13日㈭に佐野愛子氏（明治大学大学院文学研究科）を招聘し、公開研究会を開催した。佐野氏の講演題目は「『禅苑集英』研究をめぐって――徐道行の転生譚を中心に――」であった。『禅苑集英』は、唐から李の時代におけるベトナム仏教の法灯の系譜を記すもので、無言通派と毘尼多流支派と草堂派の僧伝が記されている。その成立は、陳朝の時代である1337年以降と考えられるが、正確な成立年代は不明である。無言通派に関わる人物によって編纂されたと推測されるが、編者についても不明である。『禅苑集英』には、いくつかの版本が存在する。なかでも、1715年（永盛11年）のものが現存する最も古いテクストということになる。『禅苑集英』が重要であるのは、まずもって当該書が13世紀以前のベトナムの仏教を知ることができる最古の文献だからである。こうした古い仏教文献がベトナムでは他に確認されておらず、文献を通して我々が知り得るベトナム仏教史はいまだ限定的なものである。この『禅苑集英』はベトナム仏教史のひとつの側面を記述するものにすぎないとしても、こうした理由からきわめて貴重なものと言える。

佐野氏は、説話に対する関心からベトナムの文献に注目し、『禅苑集英』を扱っている数少ない若手研究者のひとりである。この度の講演では、まず『禅苑集英』のテクストや先行研究の状況が手際よく整理され報告された。川本邦衛の論考（「「禅苑集英 Thien Uyen Tap Anh」の仮託と虚構――Tran van Giap: Le Bouddhisme en Annam に即して」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』８、1976年）は、日本における最初の『禅苑集英』研究であり、そこでは『禅苑集英』の記述が批判的に分析された。また、ベトナムでは、レー・マイン・タット（Lê Mạnh Thát）による訳注研究（*Nghiên cứu về Thiền Uyển Tập Anh*, Nxb Thành phố Hồ Chí Minh.）が1976年に出版され、以降改定が重ねられてきた。まとまった研究として必ず参照しなければならないものとなっている。このように『禅苑集英』研究は確かにある。とはいえ、川本邦衛が示したような問題関心が引き継がれて今日まで十分に検討がなされてきたわけではない。歴史・文学・仏教学等それぞれの視点から検討すべきことがいまだ山積している。今回の講演では、こうした『禅苑集英』研究の現況が明確に提示された。先行研究を丁寧に確認し得たという点だけをとりあげても、我々にとってきわめて有益であった。そのうえで、佐野氏は『禅苑集英』のなかの徐道行の転生譚を例にあげ、徐道行の逸話がどのように形成されたものか、この逸話が『大越史略』のような史書に掲載されるに至ったのはなぜか、との問いを立て、丁寧に論じられた。発表では『禅苑集英』の原典と翻訳、『大越史略』の原典と翻訳が資料として提示されたことから、容易に検討のプロセスを共有することができた。徳の高い僧侶が国王の子に転生するという物語が神宗の即位を正当づけるものと見做されたのではないか。そういった即位の積極的な肯定の態度が『大越史略』にまで記載されるひとつの要因だったのではないか。あるいは杜善の『史記』に徐道行の転生の記述が載り、『大越史略』の撰者は〈史実〉として扱ったと捉えておいてよいかもしれない。佐野氏は以上のような想定を結論として提示された。こうした発表を受けて、参加者とのあいだで内容に関する質疑応答のみならず、ベトナムの文献に関する情報交換をも行うことができた。とりわけ、ホーチミンの慧光書院が収集する文献に関する情報を得られたのは、本研究班としても有益であった。なお、講演会終了後、慶聞館５Ｆ マルチスペース５Ｆ南にて意見交換会を開催した。

講演する佐野愛子氏

特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」公開研究会

山間地域の過去・現在・未来－「集落」の消失と生成から考える－ 福田恵氏（広島大学准教授）開催報告

新しい時代における寺院のあり方研究　研究員・准教授　藤元 雅文

特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」は、人口減少社会における地域と寺院の抱える問題点に関する調査・分析、および過疎地域において寺院の果たしうる役割についての研究をテーマとしている。特定研究が開始された2017年度の下半期から、主たる調査対象地域を岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区に定め、調査、分析、研究を行ってきた。当該地域は典型的な中山間地域であることから、この地域を調査分析していく上で、山間地域および農村社会学の分野における研究動向などを含めた地域研究の知見は重要な基礎知識となる。それゆえ、2018年度は、林業を中心とした山村地域の移動やネットワークに関する数多くの業績を世に問うている、地域社会学の研究者・福田恵氏（広島大学准教授）をお招きし、2019年1月29日㈫に公開研究会を開催することとなった。研究会はまず福田氏から「山間地域の過去・現在・未来――「集落」の消失と生成から考える――」というタイトルの講演を1時間程度行っていただき、そのうえでテーマに関する質疑応答の時間を設け、テーマに関する議論を深める形で開催した。当日は、特定研究にかかわる研究員に加え、真宗学、仏教学、社会学にかかわる教員、大学院生、学部学生など多数が参加し、活発な公開研究の場となった。以下、福田氏の研究報告の概要を中心に述べていきたい。

公開研究会のタイトル「山間地域の過去・現在・未来」が明示しているように、今回の報告は「Ⅰ現在――諸課題と住民の取り組み――」、「Ⅱ過去――豊かな山間地域？――」「Ⅲ未来――大きな／小さな「社会」から」という三部構成で行われた。

まず、Ⅰ部の山間地域の“現在”に関する報告では、激しい人口減少と超高齢化社会という課題的状況において山間地域の住民たちは産業の育成に継続的に取り組んでいる一方、特に現在の山間地域の特徴として、女性、移住者、町外者などによる新しい地域づくりのネットワーク化をあげることができるという氏からの指摘があった。このような現在の特徴に対し、Ⅱ部の山間地域の“過去”についての報告では、かつて山間地域には林業を中心としながら、資源の多様性を兼ね備えた、山間地特有の“豊かな”産業特性が存在していたこと、また農村社会に多く見出せる、地縁を中心とした密集した住民組織とは異なり、移動的・流動的・多核的なネットワーク構造が山間地域において存在していたとの解説があった。さらにⅢ部の山間地域の“未来”における報告は、山間地の集落において「消失しつつあるもの」と「生成しつつあるもの」とを明確化し、そのことを通して、未来のすがたを浮かび上がらせる内容であった。氏の報告によれば実際に消失しつつあるものとしては、個々の集落が有する「地域の記憶や語り、アイデンティティ、場所、景観」が挙げられるが、そればかりではなく“大きな社会”がこれまで前提にしていた「盤石な土地所有、国土と都市の安全（性）」を揺るがしかねない事態が起こってきているということであった。一方で、生成しつつあるものとして、衰退していく集落をサポートする「ネットワーク」が生み出されつつあり、また“小さな社会”という視点では、個々の「生と場所の意味の生成」や、「多様な人びととの関係の生成」があげられた。このことを受けて、講演の最後に山間地域が直面している現状が単なる衰退消滅ではなく、これまでの社会のあり方を問い、新たな「生の意味」や「関係」の生成を生み出すことになっていることを提示して、講演全体が締めくくられた。

引き続き行われた質疑応答では、山間地域における道路整備からの撤退や交通権に関わる問題、消滅しつつある山間地域のために私たちが果たしうる役割とは何か、具体的に何ができるかという問題などをめぐって、活発な議論が展開された。

上記のように、山間地域、農村社会を専門とする福田氏からの研究報告は、特定研究の中心課題の一つである、中山間地にある過疎地域の現在、過去、未来のあり方を理解するうえで、大変有意義であり、かつ示唆に富む知見を私たちにあたえてくれるものであった。

戦中期の真宗大谷派の海外布教に関する公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）嘱託研究員・准教授　井黒 忍

東アジア班では、2018年12月15日㈯に東アジアにおける宗教と文化に関する研究活動の一環として、戦中期における真宗大谷派の琉球布教に関する公開研究会を開催した。報告者は川邉雄大氏（二松学舎大学）、報告テーマは「明治期琉球における真宗法難事件――小栗憲一を例として――」である。学内外から計16名が参加し、琉球での布教の方法や小栗憲一の教団内における位置づけなど、多方面にわたり活発な議論が行われた。報告の概要は以下の通りである。

まず、明治期の琉球における真宗法難事件の経緯として、明治９年（1876）、田原法水らは真宗禁教下の琉球において布教を開始し、遊女などを中心に信徒を獲得していった。しかし、明治10年（1877）９月、琉球藩庁によって信徒は捕縛され、翌明治11年（1878）２月に藩庁は裁判を行い、信徒に流刑・罰金刑を科した。同年７月、本山から琉球に派遣された小栗憲一は信徒の釈放を求め、現地で藩庁や内務省出張所と交渉にあたった。８月、出張所は藩庁による裁判を無効として、信徒の釈放と罰金の返還を命じた。

以上が同事件の概要であるが、先行研究および資料は少なく、事件の詳細も必ずしも明らかではなかった。そこで、同事件における小栗憲一の活動について、小栗が住職をつとめた善教寺（大分県佐伯市）に所蔵する資料などをもとに検討したところ、以下の内容が明らかとなった。まず、東本願寺と明治新政府との間で当初、主な争点となったのは、藩庁による信教自由および司法権の侵害の二点であった。これに対して、東本願寺は小栗憲一を琉球に派遣し、藩庁と折衝することとなったが、派遣前にすでに東本願寺と松田道行、吉原重俊ら政府要人との間で事前協議が行われ、信教の自由について議論することは対キリスト教の関係上困難であるため、司法権の侵害を論点とすることとなる。

小栗は那覇到着後も木梨精一郎ら内務省出張所員と頻繁に接触し、藩庁の回答について報告するとともに対策が話し合われた。明治11年８月22日に出張所で行われた対弁では、藩庁による司法権の侵害が譴責され、これにより藩庁は出張所に対して始末書を提出した。政府にとってこの法難事件は、当時必ずしも明確ではなかった琉球藩内における司法権が日本政府に属することが確認された「好機会」であった。琉球処分の後、東本願寺は寺院を設置し、監獄説教・免囚保護事業なども行ったが、琉球と同じく禁教地であった鹿児島県とは対照的に、信徒を大量に獲得することなく、政府から積極的な支援を受けた形跡は見られない。

東本願寺は琉球で布教を行う際、「説教条規」などを作成し、真宗の教義である「王法為本」について、内地とは異なる解釈を用いて布教活動を進めて行こうとした点は注目に値する。明治31年（1898）、小栗は連枝とともに韓国を訪問し、韓国皇帝と面会している。この時、小栗は「真宗ハ王法為本ノ宗義ナレバ韓帝及ビ皇太子の尊牌ヲ別院に安置スルコト」などを奏上し、朝鮮布教においては設置する尊牌を天皇ではなく、韓国皇帝としている。これは小栗の琉球での経験を参考に行われたものと考えられる。明治30年代、小栗は本山議制局長をつとめ宗務に関与するとともに、内地雑居反対を唱えるなど、引き続きキリスト教対策に従事した。

戦中期の中国における仏教史跡調査に関する公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）嘱託研究員・准教授　井黒 忍

東アジア班では、2019年２月15日㈮に東アジアにおける宗教と文化に関する研究活動の一環として、戦中期の中国における仏教史跡調査に関する公開研究会を開催した。報告者は藤井由紀子氏（同朋大学仏教文化研究所）、報告テーマは「日中戦争下の学術調査と仏教――新出の『小川貫弌資料』を中心として――」である。学内外から計16名が参加し、多方面にわたり活発な議論が行われた。報告の概要は以下の通りである。

日中戦争時、西本願寺では、興亜留学生という立場で、若き研究者を中国に派遣し、仏教史跡の学術調査にあたらせることが行われていた。むろん、戦時下のことである。当時の記録に「仏教工作」の語が使われているように、彼らの学術調査の背後には陸軍特務機関の存在があり、占領先の歴史文化を把握することで宣撫工作につなげる、諜報活動的な意図が期待されていたことは明らかである。

ただし、発表者は各務原市の西厳寺で、小川貫弌（本願寺派住職・龍谷大学名誉教授）という、仏教史学者の記録を見出したことで、日中戦争時の学術調査は、外交戦略の道具というだけでなく、政治的思惑を超えた人的交流の場でもあったことを痛感するようになった。海外布教だけでなく、学者たちの調査拠点ともなっていた各地布教所や、仏教工作の舞台として大々的なイベントが行われた五台山では、仏教や学問が本来持っている普遍性ゆえか、戦時下でありながら、国家の枠組みを超えた、人的交流の場であったことが浮かび上がってきたからである。今回の発表では、小川の遺した記録を中心に、日中戦争下の学術調査の歴史的意義について考察を行った。

西厳寺蔵『小川貫弌資料』について。平成28年（2016）３月、西厳寺での大蔵経調査にて貫弌氏のご子息であり当寺の住職である小川徳水氏から提供された資料の中に、赤い罫線に「陸軍」と印字された用紙にびっしりと書き込まれた以下の調査報告類が含まれていた。①「崇善寺宋元大蔵経存欠調査と整理の為め特務機関の援助ヲ申請の件」（１枚／昭和16年７月）、②「太原崇善寺所蔵経調査備忘録」（14枚／昭和16年７月）、③「太原崇善寺所蔵宋元版大蔵経存欠調査日記抄」（４枚／昭和16年７月）、④「山西省太原崇善寺所蔵　宋元両大蔵経　存欠調査報告書」（11枚／昭和16年８月）。

資料の総数は戦中期のものに限っても約170点（2019年２月15日現在）におよび、中にはアルバム、スクラップブック類（写真、パンフレット、チラシ、手紙などを添付）６冊、・自筆資料類（調査報告、調査日誌、調査メモ、原稿下書き）65点、拓本類106点、履歴書類（戦後の回顧録）が含まれる。このうち、「山西省スクラップブック」には、五台山にて開催された復興六月大会の写真類が収められる。六月大会とは、五台山最大の宗教行事で、文殊菩薩に祈りを捧げる法会であり、中国共産党軍（八路軍）が五台県を占拠し、抗日の軍事拠点を築いたために中断していた。日本軍が新民会とともに復興に着手し、昭和15年（1940）７月に復興第１回目の六月大会が行われる。翌年の第２回目の復興六月大会開催時期に五台山に入った小川貫弌は、軍の特務機関の支援などを受けて、五台山各地で金石碑文や大蔵経についての調査を行った。

研究会の様子

東京分室主催公開研究会

「仏典における弥勒に関する記述の諸相 －インド撰述文献を中心とした準備的調査－」開催報告

元東京分室 PD 研究員　稲葉 維摩

2019 年２月 27 日㈬、真宗総合研究所東京分室にて第７回「宗教と人間」研究会を開催した。講師は宮崎展昌氏（一般財団法人　人文情報学研究所研究員）、題目は「仏典における弥勒に関する記述の諸相――インド撰述文献を中心とした準備的調査――」である。

宮崎氏が調査した「弥勒（慈氏、慈尊、Skt.: Maitreya; Pāli: Metteya）」は初期・大乗仏典等、数多くの仏教文献に言及される人物で、遠い未来に仏となる菩薩の名である。弥勒三部経や六部経のような弥勒経典も存在する。宮崎氏は次のことを問題点として指摘する。すなわち、従来は弥勒を主役とする諸経を対象とした研究が主であり、仏典に広くあらわれる弥勒に関する種々の記述については、これまでに詳細な調査、検討がなされることは限られていた。この問題を踏まえて、宮崎氏は初期仏典と部派仏教文献に現れる弥勒に関する記述を再整理し、大乗経典にみられる弥勒に関する記述の一部についての準備的調査を発表した。

初期仏典ならびに部派仏教文献では、弥勒は主に未来仏・如来として言及され、菩薩としては『増一阿含』の数例に限られること、特定の人物と関連して描かれること、弥勒が出現する年代などを確認した。『増一阿含』の一部には、大乗仏教に通じる記述もあった。

大乗仏典では、修行者が将来、仏になることを予言する「授記」に関連して、弥勒仏への言及がある。特に悪人、外道（仏教以外の宗教に属する人）、声聞、女性、天、竜などへの授記の際に弥勒仏が言及される場合があった。

大乗仏典では、弥勒は菩薩として登場する例が多くなる。本研究会では、弥勒菩薩が兜率天にいること、仏となって現れる年代、一生補処（次の生で仏になることが決まっている状態）の菩薩であること、経典が弥勒に嘱累（付託）されることを見ていった。

最後に今後の展望として、宮崎氏は、大乗仏典の多くがまだ研究されるに至っていないという問題を指摘した上で、まず個々の仏典をきちんと分析していくこと、それとともに経典の間の関係も調査する必要があることを示した。同時に、今回の弥勒のように、通説を再検討していくことの重要性も指摘した。

発表の後には質疑応答が行われた。

研究会の様子

東京分室 PD 研究員個人研究紹介

近代日本の大衆文化における教祖像の研究

東京分室 PD 研究員　大澤 絢子

近代的な宗教概念の西洋中心主義的な性格が疑問視される昨今、M. アワーバックによる“*A Storied Sage*”（2016）のように、教祖像に関する新たな研究成果が多数発表されている。エルネスト・ルナンの『イエスの生涯』（1863）以来、こうした教祖表象の形成過程は宗教史にとっての重要な検討課題となっており、私はこれを日本宗教史に寄せ、浄土真宗という日本最大の宗教組織の宗祖・親鸞像の形成過程に焦点を当ててきた。

親鸞の生涯は、没後間もなく制作された「親鸞伝絵」と、大正期に発見された『恵信尼消息』等の史料を中心に、「史実」や思想面からの検証が行われてきた。一方、親鸞の「イメージ」を検証する研究は少なく、親鸞が中世から「物語」を通じて「教祖」としてイメージされ、特に明治以降に各宗の教祖の中でも際立って新聞・雑誌・映画等のメディアで取り上げられるようになった通史的プロセスは、十分に検証されてこなかった。そこで、親鸞像の通史的な変容過程の解明を目的に、親鸞像が一般社会に浸透していく過程を解明してきた。研究の軸としたのは、親鸞の生涯を描き、語る最重要絵巻とされる「親鸞伝絵」であり、ここで打ち出された親鸞像が、中世・近世・近現代にかけて、いかに変化してきたかを明らかにしてきた。

研究ではまず、宗祖としての親鸞聖人像がいかに創出されたのかを、「親鸞伝絵」の図像の分析により明らかにした。その上で、この親鸞像が「宗派意識」、「『歎異抄』解釈の変化」そして「大衆文学」の登場によって変化し、次第に「人間化」、「大衆化」していくプロセスを解き明かしてきた。この研究によって、現在では当然のように捉えられている『歎異抄』や「妻帯」といった親鸞像に付随する要素が、どのような過程で加えられてきたのかも明らかとなり、親鸞が浄土真宗の宗祖という枠を超えて語り出され、そのイメージが変容していくプロセスを捉えることができた。

特に、新聞・雑誌・映画などのメディアの観点から近代の親鸞像の大衆化の過程を明らかにしてきた点は、研究の特色である。研究では、大正期のメディア界で生じた宗教小説の流行を分析して作家たちの経歴や創作の経緯を明らかにし、この成果を『親鸞文学全集大正編』（同朋舎、2017～2018）としてまとめるに至った。

直近の課題は、近代日本の枠組みで、「史実」と「創作」の視点から、日本社会の「宗教」とモダニティの関係の一側面を解明していくことである。その際に着目したいのが、「大衆文化としての教祖像」という側面である。研究の第一段階としては、近代出版メディアにおける親鸞像展開のプロセスを明らかにする。そこでまず、大正期に活躍した作家・石丸梧平（1886-1969）の親鸞論を分析する。彼を取り上げる理由は、僧侶でもなく、門徒でもない立場ながら、独自の親鸞論を量産し、同時代のメディアを駆使して一般社会へ盛んに親鸞の「物語」を発信していった点による。

この作業を経て、小説・雑誌・映画も含む、「歴史」を叙述する大衆文化メディアが一般化していく近代において、教祖像が日本の近代化の過程とどのように関わってきたのかを検証する。研究内容としては、教祖たちを題材とした文学と、教祖たちの史実を検証した近代アカデミズムの影響関係の考察である。

教祖の「物語」は、教団のアイデンティティ保持や信仰の統制のために編まれてきたが、近代では、歴史上の人物としての教祖のイメージが、教団とは一線を画したアカデミズムや一般社会との関係でも再編成されていく。今後の研究では、教祖像を主軸とした小説などの「創作」と、学術的な伝記が示す「史実」との関係を詳細に比較・検証することで、教祖が「史実」と「創作」の双方を通してイメージ化されていく近代日本の「宗教」受容の過程を解き明かしていきたい。

大正期親鸞ブームの代表作
石丸梧平『人間親鸞』（1922）

坂東本『教行信証』読解のための基礎研究

東京分室 PD 研究員　青柳 英司

筆者は大学院修士課程から、鎌倉時代の仏教者・親鸞（1173-1262）の思想を研究領域として、その主著とされる『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）の読解に取り組んできた。その際に課題としたのが親鸞の救済観であり、筆者はこれを『教行信証』「信巻」で論じられる「真仏弟子」という概念を通して考察した。特に従来の研究では、以下のような問題が見られた。①親鸞の仏弟子観の背景となっている、唐代の仏教者・善導（613-681）の仏弟子観をまとめた研究が見られない。②親鸞は「真仏弟子」の「真」を、「仮」「偽」に対するものとして把握する。しかし、「仮」「偽」の問題を主題とする「化身土巻」の文脈を踏まえて、親鸞の仏弟子観を論じた研究は十分でない。そのため筆者はこれらの課題に取り組み、その成果を博士論文にまとめた。

しかし、その過程で『教行信証』の文献学的な研究の必要性を感じるようになった。また『教行信証』には中世以来、膨大な量の注釈が作られており、さらに近代以降では、歴史学や国文学など他分野の視点からも、研究が進められることとなった。しかし、その全体を整理して『教行信証』を読み直す研究は、未だに十分ではない。そこで筆者は、次の２点を現在の研究の課題としている。

1、坂東本『教行信証』の訓点研究

鎌倉時代の漢文著作である『教行信証』を現代人が理解するためには、鎌倉時代語の特徴や親鸞の表記法に関する研究が、不可欠であると考えられる。そして『教行信証』には坂東本と呼ばれる真蹟本が現存しており、2011 年の親鸞 750 回忌に際して詳細な翻刻が行なわれ、あわせて原寸大の影印本が刊行された。これによって親鸞の真筆本に依拠した『教行信証』の読解が、より精密なかたちで可能になったと言える。

しかし、親鸞の著作に対する従来の文献学的な研究には、偏りが見られる。坂東本の書誌に関する研究の白眉は、重見一行の『教行信証の研究』（法藏館、1981 年）である。ただ、本書は坂東本の漢字の筆跡に注目して、成立年代や成立過程を考察したものであり、訓点部分に関する研究は決して十全ではない。また、親鸞の語彙や表記法に関する従来の研究は、和語著作に対するものが中心であり、『教行信証』を扱うものは多くなかった。もちろん、坂東本の訓点を網羅的に整理し、その特徴を考察するということも、十分には行われていない。そこで本研究では、坂東本の訓点を網羅する索引を制作し、そこに見られる親鸞の語彙と表現方法について考察を試みる。

2、『教行信証』の解釈史の整理

前述のように、『教行信証』には膨大な数の注釈が作られており、極めて多様な解釈が示されてきた。しかしそれらを概観して研究史を描き出すという試みは、これまでのところ網羅的には行われていない。そこで 2016 年に親鸞仏教センターの主導のもと、大谷大学真宗総合研究所と真宗大谷派教学研究所の三機関が連携し、「近現代『教行信証』研究検証プロジェクト」が発足された。このプロジェクトは『教行信証』の研究史を追跡して、特に近世から近代への教学の転換点を明らかにし、坂東本に依って『教行信証』を読み直すものである。筆者もこのプロジェクトに参加しており、当面は「総序」「教巻」の読解に取り組む。

ただ、坂東本の「総序」と「教巻」は欠損が激しいため、原文の復元を試みる必要がある。『教行信証』の古写本には、親鸞在世中の写本である高田本と、親鸞の没後すぐに作られた西本願寺本とが現存している。また、室町初期の延書本である源覚本や、江戸期に坂東本を臨写した丹山本の写本なども残されている。これらの内容にはそれぞれ微妙な差異があり、完全に一致するものではないが、坂東本の原文を推測する一助になるものと考えられる。よって、これらを精査し相互に比較することを試み、その上で従来の解釈の妥当性を検証する。

坂東本『教行信証』（影印本）

「孝」思想に基づく終末期医療の法と倫理
－儒教文化圏における「善終」の実践と意思決定制度の変遷－

東京分室 PD 研究員　鍾 宜錚

私はこれまで儒教文化圏を対象に、「良い死」とされる概念と死に方をめぐる様々な言説を考察し、個別の社会で見られる終末期医療の発展と法制化の過程、及び宗教や文化に影響を受けた終末期の医療倫理のあり方を分析してきた。特に東アジアにおいていち早く終末期医療の法制化を完成した台湾を事例に、①「善終（善い死）」の概念と実践と②「善終」の概念と終末期医療の法制度との関係性を中心に研究してきた。

博士課程では、儒教の伝統である「祖先崇拝」と「魂」をめぐる民間信仰に基づき、家で死を迎えることを「善終」とする台湾人の死生観に注目し、「死ぬ場所」の変化と終末期医療の法制化との関係性を解明した。台湾では、患者を家で死を迎えさせるために、瀕死状態の患者をあえて退院させて、民間の救急車で自宅へ搬送する「終末期退院」の慣行がある。自宅以外の場所で死を迎えることを避けるために生じたこの「終末期退院」は、病院以外の場所での延命治療の差し控え・中止を可能にする手段ともなった。その後、1995 年の国民健康保険制度の実施により、医療の普及とホスピスケアの導入によって病院死の人数が増加し、「場所」を重視するという従来の死生観に変化が見られた。家での「善終」に代わって、医療現場での「善終」の実践と「善終」概念の医療化が見られるようになり、「善終」の実践の重心も「死亡場所」から「終末期医療の取捨選択」へと移り変わった。

2000 年に成立した台湾の「安寧緩和医療法」は、終末期患者を対象に延命治療の差し控え・中止を認める法律である。同法は、病院での「善終」を成し遂げるために作成されたものの、家族の代理決定による延命治療の差し控え・中止を認めることで、自己決定権の確立としては不十分であると批判されている。それに対し、2016 年に成立し、2019 年に施行された台湾の「患者自主権利法」は、昏睡状態、植物状態、特定の難病患者など、終末期以外の患者も事前指示書による延命治療の差し控え・中止を認める法律である。「善終権」の保障を目的とした同法は、患者の自己決定を法的に認めるものである一方、自己決定による死に方を「善終」とみなすものでもある。

「善終」概念の変容と法制化との関係性を踏まえたうえで、私は終末期医療における「孝」（日本の場合は「親孝行」）の表現に注目し、延命治療をめぐる意思決定と家族の葛藤を分析することで、「孝」の観点から捉える終末期医療のあり方と家族との関係性に基づいた倫理原則を提示したい。儒教文化に影響された国・地域（日本、韓国、台湾、香港）を中心に、それぞれの社会における終末期医療の法制化の動向を整理し、「孝」の概念の受容と終末期医療方針への影響を検討することで、家族関係および「孝」を前提とした倫理原則と意思決定の進め方を考察する。「孝」は、親子の関係と義務を規定する道徳概念の一つであると同時に、「孝」を行うことは、宗教儀式を執り行うことでもある。親に良い最期、すなわち「善終」を迎えさせることは「孝」であり、その内容には適切な葬送儀礼を行うことなど宗教的な意義が含まれている。上記の「終末期退院」の慣行も、「孝」思想のもとで生じた慣習だと捉えられる。また、終末期における「孝」の表現は、社会の中に宗教がどのように捉えられているかを表すものとも言える。さらに、終末期における宗教関係者の取り組みも、命の終わりである「死」に向き合う際に宗教の役割を示す見本だと考えられる。これまでの研究を踏まえて、終末期における「孝」と「善終」の概念を分析しながら、その背後に潜む死生観および宗教の役割について考察する。

国立台湾大学附属病院が、新法「患者自主権利法」の規定に基づいて設置した「事前医療決定計画」外来の宣伝ポスター

第一次世界大戦前後のフランス政治思想とキリスト教 ー極右思想家とジッドの関係に注目してー

東京分室 PD 研究員　西村 晶絵

私の主な研究対象は、19 世紀末から 20 世紀半ばにかけて執筆活動を行ったフランス人作家アンドレ・ジッド（André Gide, 1869-1951）である。プロテスタントで同性愛者でもあったジッドは、カトリックや異性愛者が大多数を占めるフランス社会の中で、少数派の立場に置かれていた。彼の生涯の関心は、自らの性的指向をキリスト教の教えと矛盾しない仕方でいかに捉えるか、という大きな問いに向けられていた。このような作家の思索を解き明かし、その特異性や社会的意義を示すことが、私の研究の大きな目論見である。

これまでの研究では、ジッドにおける「悪」の概念を、「病」と「悪魔」という二つのテーマを中心に検討してきた。ニーチェやブレイク、ドストエフスキーといった他国の作家・思想家をめぐる独自の解釈を下支えとして、否応なくも「悪」を抱えてしまう自らを認め、そうした自己を素直に神に従わせることこそが真の信仰であると説くジッドのロジックを明らかにした。

ジッドという個別の作家を対象とするこれまでの研究から浮かび上がってきたのは、その思索が多くの知識人たちとの協調や反発の中で深められてきたという事実である。そこで、今後の研究では、こうした作家・思想家たちの間に存在する複雑な思想交流の様相への着目に発し、20 世紀初頭の政治思想と宗教思想の関わりを、右翼思想家とジッドとの関係を通じて捉え直すことを目論んでいる。

第一次世界大戦前後のフランスにおいては、アクシオン・フランセーズという国粋主義的な極右の政治思想団体が大きな存在感を示した。1894 年のドレフュス事件以降、反ユダヤ主義や反フリーメイソン、反プロテスタンティズム、反在留外国人の主張を掲げ、アクシオン・フランセーズは、カトリシズムと結びつきながらナショナリズムを煽り、第一次世界大戦へと向かう中で支持者を集めた。またこの時期は、モーリス・バレスのようなカトリックと共闘関係にあった右翼の作家・批評家たちも社会の中で重要な地位を確立していた。

プロテスタントのジッドと極右思想家たちの関係は、一面的に捉えられない。確かに両者は、思想的には対立することが多かったが、そうした対立は必ずしも文筆家としての相手への評価と結びついているわけではない。また、1910 年頃のジッドは、アクシオン・フランセーズの創設者シャルル・モーラスへのシンパシーからアクシオン・フランセーズに接近している。

このように、ジッドと極右思想家たちの関係は一様ではないが、彼らには、社会変革の手段として宗教を重要視していたという共通点が認められる。したがって、両者の政治・社会思想の類似性や懸隔を明らかにするためには、彼らの宗教思想の相違点を子細に検討する必要があると考えられる。

極右の作家・批評家たちは、その国粋主義的で排外的な側面から、フランス本国においても思想や著作に対する研究や評価がさほど進んでいない。それゆえ、彼らのキリスト教思想はカトリシズムという大きな枠組みの中で捉えられ、個々の思索がどのようなものであったのかという点は捨象される傾向にある。またジッド研究においても、彼らとの関係はほとんど俎上に載せられることがなかった。そこで私は、ジッドと特に関係の深いモーラス、バレス、マシスを中心として、彼らのカトリシズムがどのような性質のものであったのかを明らかにしたうえで、その政治思想を検討することを試みる。そしてジッドのプロテスタンティズムや政治思想との比較において、極右思想家たちとジッドの間に見られる関係性の詳細を考察する。そのことを通じて、19 世紀末から 20 世紀初頭の「知識人」の思索と宗教の連関を明らかにするとともに、「キリスト教」という一つのキーワードをもとに、この時期の政治・思想運動を捉え直すことを目指したい。

パリ 15 区にあるアンドレ・ジッド通りのプレート。パリの通りは著名人の名前が付いた通りが数多く存在する。このプレートには、「アンドレ・ジッド（1869-1951）、作家、1947 年ノーベル文学賞受賞」と記されている。

真宗総合研究所彙報　2018. 10. 1 ～ 2019. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2018 年10月10日㈬16：20～16：55(博綜館第 4 会議室)

1．特別研究員の新規委嘱について
2．研究組織の変更について
3．『真宗総合研究所研究紀要』第 36 号について
4．東京分室 PD 研究員公募について

◇2018 年11月22日㈭12：15～12：55(博綜館第 4 会議室)

1．『真宗総合研究所研究紀要』第 36 号投稿論文の査読結果について

◇2019 年 1 月 17 日㈭12：20～13：00（尋源館会議室）

1．東京分室 PD 研究員の採用について
2．『真宗総合研究所研究紀要』投稿ガイドライン一部修正について
3．その他

◇2019 年 2 月 1 日㈮12：00～12：25（尋源館会議室）

1．2019 年度「一般研究」について

◇2019 年 3 月 20 日㈬13：00～13：20(博綜館第 4 会議室)

1．2019 年度「特定研究・指定研究」等の研究組織・研究計画について
2．研究組織の変更について

○2018 年度「特定・指定研究」「資料室」研究成果報告会
2019 年 3 月 8 日㈭15：30～17：40（慶聞館 K 406 教室）

○2018 年度研究員総会
2019 年 3 月 8 日㈭17：40～17：50（慶聞館 K 406 教室）

1．東京分室長の交代について
2．真宗総合研究所長からの報告
3．所長退任の挨拶

懇親会　18：00～（慶聞館マルチスペース 4 階南）

◎研究ブランディング事業ワーキングチーム会議

◇2019 年 1 月 31 日㈭12：00～13：00(響流館 4 階会議室)

1．外部評価について
2．EBS 100 周年シンポジウムについて
3．その他

新しい時代における寺院のあり方研究

【揖斐川町　寺院・門徒・地域調査】

日　時　2018 年 11 月 19 日㈪
場　所　揖斐川町社会福祉協議会
内　容　揖斐川町における下記内容の聞き取り調査
①揖斐川町地域別人口動態の推移、地域生活の変化、人口移動の特徴等
②各種地域組織・団体の活動状況
③生活関連諸サービスの利用状況
④地域振興政策状況　空き家対策、移住・定住支援、公共交通政策等
参加者　山下憲昭・野村実

日　時　2019 年 3 月 23 日㈯～ 3 月 24 日㈰
場　所　岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区
内　容　岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区における葬墓調査
参加者　本林靖久

日　時　2019 年 3 月 28 日㈭
場　所　光永寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町小宮神）
内　容　岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区における葬墓調査
光永寺住職聞き取り調査
参加者　本林靖久・磯部美紀

日　時　2019 年 3 月 29 日㈮10：00～12：00
場　所　発心寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町春日美束）
内　容　岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区における葬墓調査
遍光寺住職聞き取り調査
参加者　本林靖久・磯部美紀

日　時　2019 年 3 月 29 日㈮13：30～15：30
場　所　発心寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町春日美束）
内　容　発心寺における葬墓調査および他出門徒調査の打ち合わせ
参加者　山下憲昭・本林靖久・磯部美紀

【学外講師による研究会】

◇第 3 回

日　時　2019 年 1 月 29 日㈫16：30～18：00
場　所　大谷大学　慶聞館　K 401
講　師　福田　恵氏（広島大学　准教授）

講　題　「山間地域の過去・現在・未来　－「集落」の消失と生成から考える－」

【ミーティング】

◇第９回
日　時　2018年10月２日㈫14：40～16：10
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　日本宗教学会発表報告、研究所報、『研究紀要』論文について

◇第10回
日　時　2018年10月10日㈬18：00～19：30
出席者　木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　本林靖久　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　これまでの調査研究の総括と今後の調査研究および研究成果等について

◇第11回
日　時　2018年10月23日㈫14：40～16：10
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　学外講師による公開研究会についての検討

◇第12回
日　時　2018年11月６日㈫14：40～16：10
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　研究成果に関する検討および公開研究会・学外講師の選定について

◇第13回
日　時　2018年11月27日㈫14：40～16：10
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　11月19日㈪実施の揖斐川町社協における聞き取り調査の報告（山下研究員、野村助教より）等

◇第14回
日　時　2018年12月19日㈬18：00～20：00
出席者　木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　春日寺院調査に関する報告（徳田研究員より）等

◇第15回
日　時　2019年１月15日㈫14：40～16：10
出席者　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　公開研究会についての確認および2018年度研究成果報告書等について

◇第16回
日　時　2019年２月７日㈭14：40～16：10
出席者　木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　次年度（2019）年度における調査研究および成果公開についての検討

◇第17回
日　時　2019年３月12日㈫10：40～12：10
出席者　木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　野村実　松岡淳爾　磯部美紀
場　所　真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容　今年度の研究班の取り組みの検証と次年度における調査研究、成果公開の検討

国際仏教研究

＜英米班＞

【海外出張】

◇アメリカ哲学会発表
日　程：2019年２月20日㈬～24日㈰
於：The Westin Downtown Denver
出張者：田中潤一

【会議】

◇2018年10月25日㈭16：20～17：50
国際真宗学会パネル発表打ち合わせ
於：真宗総合研究所内　ミーティングルーム（響流館４階）
参加者：Michael J. Conway、加来雄之、井上尚実、

常塚勇哲、鶴留正智

◇2019年３月14日㈭13：00～14：30
国際仏教研究班　全体ミーティング
於：真宗総合研究所内　ミーティングルーム（響流館４階）
参加者：Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、加来雄之、田中潤一、井上尚実、新田智通、常塚勇哲、鶴留正智

【公開講演会】
日　時：2018年11月14日㈬16：30～18：00
於：演習室１（響流館３階）
題　目：Japanese Buddhism in Europe
講　師：ヨーン・ボルプ氏（オーフス大学准教授）

＜東アジア班＞
中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、同研究所より４名の研究者を招聘し、2018年12月14日㈮に響流館４階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて公開研究会を実施した。報告者および報告タイトルは以下の通りである。楊宝玉氏（中国社会科学院歴史研究所文化史研究室、研究員）「“江南の遠客跧（ウズクマ）り、翹思するも未だ還るを得ず”－晩唐期に西陲の敦煌に滞在した江南の文士」、烏雲高娃氏（中国社会科学院歴史研究所中外関係史研究室副主任、研究員）「多言語テキストに見る元代の駅と訳」、陳時龍氏（中国社会科学院歴史研究所明史研究室副主任、研究員）「聖諭六条と明清時代の基層教化」、孫靖国氏（中国社会科学院歴史研究所歴史地理研究室副主任、副研究員）「清代初期地図史引論」。

2018年12月15日㈯に、東アジアにおける宗教と文化に関する研究活動の一環として、戦中期における真宗大谷派の琉球布教に関する公開研究会を開催した。報告者は川邉雄大氏（二松学舎大学）、報告タイトルは「明治期琉球における真宗法難事件－小栗憲一を例として－」である。

2019年２月15日㈮に、戦中期における日本の仏教者および仏教史学者によって行われた中国仏教史跡調査に関する公開研究会を開催した。報告者は藤井由紀子氏（同朋大学仏教文化研究所）、報告タイトルは「日中戦争下の学術調査と仏教－新出の『小川貫弌資料』を中心として－」である。

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、2019年３月３日㈰より３月７日㈭の間、浅見直一郎教授と岩本真利絵任期制助教を特別招聘者として派遣し、同月５日㈫に中国社会科学院歴史研究所において研究報告を行った。報告者と報告タイトルは以下の通りである。浅見直一郎氏「４～７世紀の日本における中国文化の受容－最近の研究を中心として－」、岩本真利絵氏「管志道の思想形成と政治的立場－万暦五年張居正奪情問題とその後－」。

西蔵文献研究
【海外出張】
◇３月25日㈪～27日㈬
場　所：中国・北京
目　的：中国蔵学研究中心訪問
出張者：三宅伸一郎・上野牧生（ともに研究員）

【国内出張】
◇３月13日㈬
場　所：宗林寺（富山県南砺市城端）
目　的：『モンゴル仏教史』借用期間延長をお願いし、出版許可を得るため
出張者：三宅伸一郎（研究員）

ベトナム仏教研究
【研究会】
◇2018年11月５日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2018年11月19日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2018年12月３日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2018年12月17日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2019年１月21日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2019年２月14日㈭13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2019 年２月 21 日㈭13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇2019 年３月 11 日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

【公開研究会】
2018 年 12 月 13 日㈭16：30～18：00
（慶聞館４Ｆ　Ｋ 403 教室）
佐野愛子氏（明治大学大学院文学研究科）を招聘し、公開研究会を開催した。佐野氏の講演題目は「『禅苑集英』研究をめぐって――徐道行の転生譚を中心に――」であった。講演会終了後、慶聞館５Ｆ　マルチスペース５Ｆ南にて意見交換会を開催した。

【研究協議・海外調査】
2019 年２月 26 日㈫～３月５日㈫
出張者：箕浦暁雄研究員・宮嶋純子嘱託研究員・Nguyễn Tường Giang 研究補助員
フエの了観センター、フエの宗教研究院分室、ハノイの宗教研究院を訪問し、また Phạm Thị Thu Giang 氏（ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授・ベトナム仏教研究嘱託研究員）と面会して、研究協議を行った。また、ハイズオン省の柳幢という小村を訪れ、木版印刷の刻工に関する調査を行った。

清沢満之研究
【ミーティング】
◇第１回
日　時：2018 年 10 月 11 日㈭11：00～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：清沢満之記念館出張時の資料の確認、検討
資料の読み合わせ班の検討

◇第２回
日　時：2018 年 10 月 18 日㈭10：40～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
読み合わせ作業の注意事項、凡例の確認

◇第３回
日　時：2018 年 10 月 25 日㈭10：40～11：30
出席者：西本祐攝、大艸啓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：岩波書店との交渉の現状把握

◇第４回
日　時：2018 年 11 月 22 日㈭10：40～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
読み合わせ検討事項の確認、検討

◇第５回
日　時：2018 年 11 月 29 日㈭16：00～16：20
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
読み合わせ検討事項表の作成

◇第６回
日　時：2018 年 12 月 13 日㈭10：40～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
岩波書店との交渉進展に向けての検討

◇第７回
日　時：2018 年 12 月 20 日㈭16：00～16：20
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：全体会議の検討事項確認

◇第８回
日　時：2019 年１月 17 日㈭11：00～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
読み合わせ検討事項の確認、決定事項の共有

◇第９回
日　時：2019 年２月６日㈬10：30～12：00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：岩波書店出張時に持参する目次案、校正済み資料の確認
校正、読み合わせ作業の進捗状況報告

◇第 10 回
日　時：2019 年２月 13 日㈬15：30～16：00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：全体会議の検討事項の最終確認
岩波書店出張の報告

◇第 11 回
日　時：2019 年２月 18 日㈪16：00～17：00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の状況確認
読み合わせのペースアップの検討

◇第 12 回
日　時：2019 年２月 25 日㈪14：00～15：00
出席者：西本祐攝、大艸啓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：研究班の人員の追加について

◇第 13 回
日　時：2019 年３月 14 日㈭12：10～12：50
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正、読み合わせ作業の状況確認
読み合わせ作業時判別困難なものの検討

◇第 14 回
日　時：2019 年３月 25 日㈪14：30～16：00
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正、読み合わせ作業の状況確認
来年度全体会議の確認事項の検討
研究組織の人員追加の検討

【全体会議】
◇第１回
日　時：2018 年 10 月 11 日㈭12：20～1：00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、福島栄寿、大艸啓、川口淳、藤井了興
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：読み合わせの方法、作業計画の確認
読み合わせ班、資料の確定

◇第２回
日　時：2019 年１月９日㈬12：20～13：00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、福島栄寿、大艸啓、川口淳、藤井了興
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：研究班内の出版社交渉窓口の引継ぎの承認
岩波書店出張時確認事項の検討
公開講座開催の提案、検討

◇第３回
日　時：2019 年２月 13 日㈬16：00～18：00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、福島栄寿、大艸啓、名畑直日児、川口淳、藤井了興
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
目　的：岩波書店出張の報告、確認、来年度以降の刊行計画の共有
清沢満之記念館出張の報告、「世界の進み（二）」（『徳風』26 号）掲載の検討
校正作業の進捗状況報告
読み合わせ検討事項の決定、共有

【出張】
日　程：2019 年２月８日㈮
場　所：岩波書店（東京都千代田区）
目　的：これまでの交渉内容の確認
別巻刊行にむけての予算、計画、刊行形体等の確認
出張者：西本祐攝、大艸啓

上記のほか、『全集』別巻掲載原稿について、読み合わせ作業を中心とした編集業務を、構成員全体で日常的に行っている。

大谷大学史資料室
【研究会参加】
◇全国大学史資料協議会　2018 年度総会ならびに全国研究会
日　程：2018 年 10 月 10 日㈬～10 月 12 日㈮
場　所：九州大学　医学部 100 年講堂　箱崎キャンパス
参加者：松岡智美・老泉量

◇第２回広島大学文書館研究集会
日　程：2018 年 12 月８日㈯
場　所：広島大学中央図書館ライブラリーホール
参加者：松岡智美

◇全国大学史資料協議会西日本部会　2018 年度第４回研究会
日　時：2018 年 12 月 11 日㈫
場　所：大阪工業大学　梅田キャンパス
参加者：松岡智美・老泉量

【報告等】
『全国大学史資料協議会西日本部会会報』第 35 号掲載の「2018 年度第４回研究会参加記」を老泉が執筆

【史料調査】
2018 年 10 月、12 月、2019 年１月に、学内外から３件の所蔵史料に関する問い合わせを受け、調査・報告を行った。

【展示活動】
◇2019 年３月 29 日㈮16：00～17：30
図書館エントランス展示スペース「年表でみる大谷大学の歴史」の展示準備

デジタル・アーカイブ資料室（パーリ関係）
【海外出張】
◇2019 年３月７日㈭～３月 15 日㈮
場　所：タイ王国・バンコク
目　的：タイ国内パーリ語写本関係調査、稀覯文献読解の共同研究
出張者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

【国内出張】
◇2019 年３月 20 日㈬～３月 21 日㈭
場　所：恵林寺（山梨県甲州市）
目　的：恵林寺所蔵パーリ語貝葉写本調査
出張者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

【調査】
◇2019 年１月 30 日㈬
場　所：大谷大学博物館
目　的：パーリ語貝葉写本デジタル写真撮影
従事者：清水洋平・舟橋智哉（ともに嘱託研究員）

◇2019 年１月 31 日㈭～２月１日㈮
場　所：大谷大学博物館
目　的：パーリ語貝葉文献と付属資料（包み布および挟み板）の調査
従事者：原田あゆみ（九州国立博物館）、佐藤留実（五島美術館）、清水洋平（嘱託研究員）、舟橋智哉（嘱託研究員）

■東京分室
東京分室指定研究
【出張】
◇2019 年２月３日㈰～13 日㈬
出張先：前半は沖縄竹富島・石垣島、後半は長崎五島列島
用　務：沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査。沖縄の伝統的生活が今なお色濃く残る竹富島・石垣島に点在する御嶽を訪ね、聖地および聖なるものを検証した。長崎五島列島では、苛烈な弾圧のもとひたすら守り続けられてきた隠れキリシタンの信仰について調査実施。
出張者：池上哲司・松澤裕樹・藤原智

【研究会】
◇2018 年 10 月３日㈬
内　容：アウグスティヌスにおける自由とは何か
発表者：松澤裕樹

◇2018 年 10 月 10 日㈬
内　容：パーリ語の動詞基本形の分析
発表者：稲葉維摩

◇2018 年 10 月 17 日㈬
内　容：パーリ語の直説法現在とアオリスト２
発表者：稲葉維摩

◇2018 年 10 月 24 日㈬
内　容：高野山大学図書館所蔵『弁正論』について
発表者：藤原智

◇2018 年 10 月 31 日㈬
内　容：沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査計画策定

◇2018 年 11 月 14 日㈬
内　容：クヴェードリンブルクのヨルダンのラテン語説教におけるエックハルトの影響
発表者：松澤裕樹

◇2018 年 11 月 21 日㈬
内　容：パーリ語の語り
発表者：稲葉維摩

◇2018 年 12 月 5 日㈬
内　容：第６回「宗教と人間」研究会シンポジウムのための勉強会１

◇2018 年 12 月 12 日㈬
内　容：第６回「宗教と人間」研究会シンポジウムのための勉強会２

◇2019 年 1 月 16 日㈬
内　容：沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査打合せ

◇2019 年 1 月 23 日㈬
内　容：エックハルト存在論における無の意味
発表者：松澤裕樹

◇2019 年 1 月 30 日㈬
内　容：沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査最終打合せ

◇2019 年 2 月 20 日㈬
内　容：清沢満之「有限無限録」における道徳と宗教
発表者：藤原智

◇2019 年 3 月 6 日㈬
内　容：沖縄・五島列島宗教的聖地実地調査報告
発表者：藤原智

【公開研究会】
◇2018 年 12 月 16 日㈰13：00～17：00（立教大学池袋キャンパス 12 号館　B１　第１・２会議室）
第６回「宗教と人間」研究会
テーマ：「恩寵と他力－キリスト教と仏教の対話－」
講演者：Johannes Brachtendorf（テュービンゲン大学教授）　田島照久（早稲田大学名誉教授）　角田佑一（上智大学専任講師）　木越康（大谷大学教授）

◇2019 年 2 月 27 日㈬16：00～18：00（親鸞仏教センター５F セミナー室）
第７回「宗教と人間」研究会
テーマ：「仏典における弥勒に関する記述の諸相－インド撰述文献を中心にした準備的調査」
講　師：宮崎展昌（一般財団法人　人文情報学研究所研究員）

個人研究藤原班
【出張】
◇2018 年 10 月 8 日㈪～ 9 日㈫
出張先：大谷大学
用　務：伊東恵深『親鸞と清沢満之』を読む－著者を交えての合評会－
出張者：藤原智

◇2018 年 11 月 2 日㈮
出張先：大谷大学、龍谷大学瀬田キャンパス
用　務：大谷大学図書館での資料収集、杉岡孝紀氏からの聞き取り
出張者：藤原智

個人研究松澤班
【出張】
◇2018 年 11 月 10 日㈯～11 日㈰
出張先：聖心女子大学
用　務：2018 年度中世哲学会第 67 回研究大会に参加・発表
出張者：松澤裕樹

◇2018 年 11 月 24 日㈯
出張先：同志社大学
用　務：CISMOR ワークショップ「マイスター・エックハルトにおける形而上学と神秘主義」に参加・発表
出張者：松澤裕樹

◇2019 年 1 月 9 日㈬～13 日㈰
出張先：韓国外国語大学
用　務：2019 International Conference on Humanistic Studies in HUFS “East and West as Centers in a Centerless World” に参加・発表

■一般研究出張関係
一般研究中野班
◇2018 年 6 月 22 日㈮～30 日㈯
出張先：アイルランド国立大学メイヌース校
用　務：「World Community Development Conference 2018」への参加及び発表
出張者：中野加奈子

◇2018 年 8 月 28 日㈫～ 9 月 6 日㈭
出張先：スペイン　バルセロナ・セバスチャン
用　務：スペインにおける障害者就労支援事業を通

じたソーシャルアクションの実態調査
出張者：中野加奈子

◇2018 年９月８日㈯～９日㈰
出張先：金城学院大学
用　務：「第 66 回日本社会福祉学会秋季大会」参加及び発表
出張者：中野加奈子

※前号未掲載のため 2018 年４月～2019 年３月の期間の出張を掲載。

一般研究山本班

◇2019 年２月 11 日㈪～20 日㈬
出張先：イタリア　フィレンツェ国立図書館・ラウレンツィアーナ図書館・サンマルコ図書館
用　務：イタリアにおける図書館成立過程の調査
出張者：山本貴子

■組織（2019 年７月１日現在）

□研究所委員会

浦山あゆみ（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）
阿部　利洋（真宗総合研究所主事）
滝口　直子（大学院研究科長）
藤谷　徳孝（教育研究支援部事務部長）
野澤　弘篤（教育研究支援課長）
織田　顕祐（教授）
松浦　典弘（教授）
徳田　　剛（准教授）
新田　智通（准教授）
藤原　正寿（准教授）
井黒　　忍（准教授）

□私立大学研究ブランディング事業ワーキングチーム

浦山あゆみ（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所長）
阿部　利洋（真宗総合研究所主事）
箕浦　暁雄（ベトナム仏教研究研究員）
Michael J. Conway（国際仏教研究研究代表者）
井黒　　忍（国際仏教研究嘱託研究員）
井上　尚実（国際仏教研究嘱託研究員）
新田　智通（国際仏教研究研究員）
松浦　典弘（国際仏教研究研究員）
松川　　節（国際仏教研究研究員、西蔵文献研究研究員）
岡田　治之（企画・入試部事務部長）
藤谷　徳孝（教育研究支援部事務部長）

■人事

研究所長　（新）浦山あゆみ　（旧）加藤 丈雄
東京分室長　（新）井黒 忍　（旧）池上 哲司
（2019 年４月１日付）

■PD 研究員

□新規採用（2019 年４月１日付）

青柳 英司
大澤 絢子
鍾　宜錚
西村 晶絵

■特別研究員

□新規採用（2019 年４月１日付）

＊岩本真利絵
現　　職：任期制助教
研究期間：2019 年４月１日～2022 年３月 31 日
研究課題：陽明学派の三教合一思想と皇帝政治

＊服部 徹也
現　　職：任期制助教
研究期間：2019 年４月１日～2023 年３月 31 日
研究課題：「文豪」夏目漱石像と岩波文化の研究：小林勇旧蔵『漱石全集』編纂関連資料を用いて

＊田鍋 良臣
現　　職：本学非常勤講師
研究期間：2019 年４月１日～2021 年３月 31 日
研究課題：ハイデッガー「黒ノート」におけるユダヤ問題の研究――形而上学批判を基点として

＊上原 尉暢
現　　職：元本学非常勤講師
研究期間：2019 年４月１日～2023 年３月 31 日
研究課題：『四六文章図』研究－日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって－

＊上田 敏樹
現　　職：本学非常勤講師
研究期間：2019 年４月１日～2020 年３月 31 日
研究課題：ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究

□解任（2019 年３月 31 日付）

岸野 亮示

研　究　所　報　第 74 号
2019 年７月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2019 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute